
私の願いは...

葉瑠衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の願いは…

【Nコード】

N4876U

【作者名】

葉瑠衣

【あらすじ】

今年から高校1年生になる、風岡明日架。彼女はある、壮絶な過去を持っていた。その“過去”とある願いから、IDO>国際探偵事務所<で働くことに。

そして、彼女の前に現れた1人の青年…

岩城隼人。

明日架はだんだん隼人に惹かれてゆき…

明日架の“過去”とは？

そして、明日架と隼人の今後は！？

探偵事務所とは書きましたが、あまり“探偵”という感じではありません。
特殊なので…。

春のある日

桜の花びらがどこからか舞い降りてくる
少し曇った4月のある日のこと…

真新しい制服に身を包み、>入学式<と書かれた看板の横をたくさんの生徒が通りすぎて行く。

彼らは皆、今日から私立^{リツリツ}昂楼高等学校の1年生となる。

その中で唯一、看板の前に立っている女子生徒がいた。

周りの生徒たちは、期待と不安に胸を膨らませているなかで、彼女の胸には不安しか無かった。

「ついに…入学式か……。ハアーーー。」

今、長いいため息をついた、風岡明日架は今からおよそ2ヶ月前のことを思い出していた。

（2ヶ月前）（IDDO日本支部にて）

「風岡、ちよつと来い！」

「はい」

今、明日架を呼んだのが、IDDO日本支部長の酒井敏宏だ。

>IDDO<というのは、International Detective office（日本語訳すると国際探偵事務所）の略だ。IDDOの仕事は、表向きは浮気調査やペットまたは人探しなど、ごく普通の探偵の仕事。

しかし裏では、警察からの依頼を受けたり、国を跨いだ事件の捜査をしたりする。

本部はロンドンにあり、ほとんどの先進国の首都に支部事務所が置かれている。

何故明日架がここにいるのかというと…それはまた後の話。

とりあえず、昔の色々で明日架は今、ここで働いている。立派な探偵として。

「なんででしょうか？」

「お前今、15か？」

「はい。でも、どうして急に歳なんて聞くんですか？」

「じゃあ、来年は16だな。」

酒井部長、明日架を完全無視。

こうなったら、諦めて答えるしかない。

「まあ、そうなりますね。」

「お前、高校には行きたくないか？」

「はい？」

そして、彼は基本的になんでも唐突だ。そこが面白いところでもあるのだが。

「実は、ある高校の理事長につてがあつてな？それでー」待つてく
ださい！！」「」

「私が見知りなご存知ですよね？」

「あー、うん、まあ知ってるが……」

「それに私は、高校の勉強もすっかりやりましたよ？それもお存知
ですよ？」

「まあ、知ってはいるが……」

実は、明日架がIDOに入るにあたって、やはりある程度の学歴は
必要だった。

だから、一応高校も大学も卒業したことにはなっている（ただし、日本ではなくアメリカの）。

そして明日架は、人見知りだ。と言うより、本当の自分を知らない人と、あまり深く関わりたくない、と言った方が良くも知れない。

「それをご存知なら、今さら高校なんて、行く意味ありますか？」

「何も俺は、また勉強して来い！って言ってるわけじゃねえよ。ただ、お前にも高校生活つてもんを知ってもらいたくてよ！」

「高校生活？」

「そつだ！高校生活は青春だ！友情だ！恋だ！」

「はあ…。」

「お前はこれら1つも知らねえーだろ？」

「まあ…。」

「だったら行って来いよ。」

「いやでも、お金が…」

「奨学金があるから大丈夫だ！」

「こっちの仕事も…」

「そんなくらい、ここに居るやつらで片付けるぞ」

完全に明日架の負け。

先ほどと同様、こつなったら諦めるしかない。

「その高校ってどこなんですか？」

↳2日後↳

「ここが昂楼高校ですか。」

今、明日架と酒井部長は昂楼高校正門前にいる。

「有名進学校って感じるだろ？」

「…まあ」

私立昂楼（ウツロウ）高等学校。

来年でちょうど創立80年で、都内でも有数の進学校である。

「あつ、酒井さん。ご無沙汰しておりました。」

「いいえ、こちらこそ。いやしかし、理事長自らお出迎えとは、光

栄ですな。風岡、こちらが昂楼高校の理事長、宮久保寛一みやくほかんいちさんだ。」

「はじめまして、理事長の宮久保と言います。酒井さんには昔、色々助けて頂いたんですよ。」

「まあ、ずいぶんと昔の話だな。あつで、こいつが電話で話した、風岡明日架です。」

「はじめまして、風岡です。」

「よろしく。まあこんな所で立ち話もなんですから、理事長室へどうぞ。」

2人は理事長のあとについていった。

〈理事長室〉

「我が校は既に、合格者が決まっております。しかし、1人増えるくらいなら…、まあどうにかなるでしょう。がしかし、いくら酒井さんの頼みとはいえ、ハイそうですかと、簡単に認めるわけにもいかず…。とりあえず、5教科のテストを受けて頂いてもよろしいですかね？」

「俺は構わないが、風岡、お前はそれでも大丈夫か？」

「私は構いません。」

というわけで、明日架はテストを受けることになった。

〈3時間後〉

「終わりました。」

「えっ？もう終わったんですか!？」

理事長が驚くのも無理はない。本当は1教科1時間でギリギリ終わるか終わらないかのテスト。それを明日架は、5教科を計3時間で終わらせたのだ。

「まあとりあえず、採点してくれ、理事長。」

「は、はい。」

〈数分後〉

「採点、終わりました。えー、理科が90点、社会が94点、数学が95点、国語と英語が100点……。酒井さん、風岡さんは、本来に来年16歳ですか？」

「まあまあ。工作上、国語と英語は高校入試レベルだったら、100点とって当たり前だ。でなきゃIDOには置いておけねえよ。で、合否は？」

「もちろん、合格です!！」

「あの時、手抜いとけば良かったのかな…。」

> 入学式<の看板の前で、後悔を口にする明日架。

「でも、あんまり悲惨な点だと、部長に殺されてたか…。」

どちらをとっても、結局後悔していたことに気付いた明日架は、諦めて…いやいや、覚悟を決めて、校舎の方へ足を進めた。

今日から明日架の高校生活が始まる…

ともだちと仕事

（校舎内にて）

「1-Cは…4階か」

創立80年の学校にエレベーターがあるわけもなく…

「はあ。これ毎日上下りするの…」

（4階到着）

「えーっと、ここか。」

中にはもう何人かの生徒がいた。

明日架は、指定された席に腰をおろす。
すると…

「あ〜」

ある1人の女子生徒が声をかけてきた。

「はい」

「唐突にこんなことを言うのもあれなんですけど、よかつたら友達になつてくれませんか!？」

きた。

でも、どうしようか。

実は、明日架の入学許可には、1つだけ条件があった。

（2ヶ月前）

「酒井さん、入学は許可しますが、1つだけ、その…条件といいますか…よろしいですかね？」

理事長がとても言いづらそうに、口を開いた。

「ほう、条件？」

「はい。もし、風岡さんがIDOにの人間だということが、学校側あるいは生徒にばれてしまった場合は…そのー」

「自主退学ですね？私は構いませんよ。」

「すみません。あつ、で酒井さんは…」

「俺は、風岡がそれでいいなら、好きにすればいい。」

「ありがとうございます。」

もし仮に明日架のことがばれてしまったら、学校をやめなければならぬ。でも、明日架はこういったものを、スパッと断れない。

「友達になるのは、全然大丈夫なんですけど、私、そのー、親の事情で転校とかあるかも知れないんですけど、それでもいいですか？」

「全然いいです！じゃあ、今日からお友達として、よろしくお願いします！！」

「よろしくお願いします。あ、私は風岡明日架です。」

「私は仲川藍子です！アド教えてくださいませんか？」

〈I D O 日本支部〉

「ただいま戻りました。」

「おかえり、明日架ちゃん。どうだった？学校、友達できたかい？」

「はい、一人。アドレスも交換しました。」

「そうか、今は、そんな時代か」

「おじさんくさいですよ、高田さん。」

高田伊知郎。

明日架がIDOに来たときからすでにいた大ベテラン。

「どーせもう、おじさんですよー。」

「全員集まってくれ」

酒井部長の集合がかかった。

「えーっと、まずは、近況報告だな、石川、猫探しどうなった？」

「えー、飼い主の心当たりを探してるんですけど、なかなか。」

石川卓也。

入所2年目。

猫探しのエキスパートのはずだが、今回はちょっとてこずっている様子。

「そうか、その他は昨日の報告の時点で…終わっているな。えーつとだな、新しい仕事の依頼が来た。」

嫌な予感は最初からしていた。

全員を集めたということは、全員へ指示を出すということ。

1つの依頼に対して、全員で対応するといふことは…

「依頼は、警視庁からだ」

やっぱり、面倒なことになりそうだ。

ともだちと仕事（後書き）

登場が増えてきたので、活動報告に人物紹介をのせていこうかなと思います。

よかったら、そちらもどうぞ。

あの人

警視庁からの依頼は、海外との麻薬の売買が近いうちにあり、それの摘発を手伝ってほしいとのことだった。

しかし、日本の警察は優秀だ。

なのになぜ、IDOに依頼がきたかということ…
今回売買を行おうとしている日本側の組織の裏に、政治家が絡んでいるらしい。

そうになると、警察には“上からの圧力”というものがかかってくる。

だから面倒なのだ。

そして明日架は今、学校にいる。

「おはよーあすか！」

「おはよ、藍子。」

お互いメールをするうちに、タメ語と名前で呼び合うことになった。

「ねえねえ、知ってる？3年生に転校生がいるらしいよ。でね、その人がメッツツチャイケメンなんだって！」

「へえ〜」

「…って、えっ？興味無い感じ!？」

「うん。」

「もー、そんなこと言ってるよ、彼氏出来ないよ!」

と言って、藍子は明日架の手を、ほら行くよ!と言いながら引っ張って行く。

「えっ、ちょ、ちょっと待って、どこに行くの？藍子!」

〈3 - A教室前〉

そこにはすでに、たくさんの女子生徒で一杯だった。

「うわ、人が多いな…」

「うん、また今度にしない？」

「ダメダメ！無理矢理にでも前行かなきゃ!」

そう言って、どんどん人をかき分け押し退け、前に行ってしまう藍子。

明日架も何とかついていってみる。

「ふわ、あっほら明日架、あの人！」

藍子が指す先には眼鏡をかけた、スラツとした青年。高校3年生には見えないような雰囲気を持っていた。

「岩城隼人先輩。なんでも、最近までイギリスにいたらしくて、お父さんの仕事の都合でこっちに戻ってきたんだって。だから、英語ペラペラ。他にも何か国か話せるらしいよ。頭も良くて、運動神経抜群。んでもって、あのルックス。文句無しだね！」

「確かに、カッコいいね。」

藍子言ったとおり、イケメンである。

ただ明日架は、別のことを考えていた。

…岩城隼人

どっかで聞いたことのある名前。

でも、どこで聞いたのか、全く思い出せない。

「あれ？藍子？」

さっきまで、隼人の隣にいた人が明日架たちの方に向かってくる。それも藍子の名前を口にしながら。

「あれ？江口先輩？」

江口先輩と呼ばれた人はとても優しくそうな、爽やかな笑顔を浮かべていた。

「どうしたの？あー、隼人目当てか。じゃあ、特別に教室入ってきていいよ。この子は友達？」

「おー、さすが爽やか男子江口先輩！この子は明日架、うちの友達。」

「はじめて、風岡明日架と言います。藍子、爽やかは関係無いんじゃない…？」

「ハハハ、確かに爽やかは関係無いね。俺は江口和也。よろしくね。」

だいたいの自己紹介を終えて、A組に入って行く。周りからの痛い視線は気にしない2人。

「藍子？江口先輩と、どうゆう関係なの？」

「んー？ただの幼なじみだよ。」

「ふーん、でも、ただのってことは無いよね？」

「へっ？何が？」

完全に動揺している、藍子。

明日架は仕事柄、人の小さな変化を見落とさない。

「好きなんですよ？江口先輩のこと。」

「…。すごいね、明日架。はぁー、もうバレたか！」

もしかしたら、隼人を見物に行くのは口実で、本当は和也に会いに来たのではないか、と思っっている明日架だった。

「はい、こいつが岩城隼人だ。隼人、こっちが俺の幼なじみの仲川藍子、で隣が友達の風岡明日架ちゃん。」

「「はじめてまして」「

「はじめまして。」

「あの、岩城先輩って、何ヶ国語話せるんですか？」

「8か9ヶ国語くらい？」

「うわー、すごい！！ちなみに、何語なんですか？」

「英語、ロシア語、イタリア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、オランダ語、ポルトガル語、中国語、韓国語かな。半分はおしゃべり程度しか話せないけど。」

「いや、おしゃべり程度でも、それだけ話せれば充分ですよ。」

明日架は驚いた。

今、隼人が挙げたもののほとんどが、IDOの職員が習得しなければならぬ言語だったからだ。

『もしかして、この人IDOの人？』

明日架はそんな事を心の中で考えていた。

「でも、なんでそんなに色々な言葉喋れるんだよ。」

「あつ、それ私も思いました。ね、明日架！」

「へ？えっ？あ、あー、うん。」

明日架は急に話をふられて焦ってしまい、変な答え方をしてしまった。

…それを見て、隼人が苦笑していたことは、誰も気付いていない。

「親父の仕事の関係で、あちこちの国に行ってたから。」

「なるほどー、じゃあ

キーン コーン カーン コーン

「はい、質問タイムしゅーりょー！はいはい、さっさと教室戻ってね〜。」

藍子の質問を遮るように鐘が鳴った。

それを聞いて、和也が2人を教室から出した。

「え〜、いいじゃんもう少しだけ！」

「我が儘言つな藍子。お前らが授業に遅れたら、俺のせいになるだろ！？」

「…お似合いだよな、あの2人。」

隼人が急に声をかけてきたので、明日架はまた焦ってしまった。

「え、あっはい、そうですね。」

「フツ、あんまりポーツとしてると、まずいんじゃないか？」

「えっ、それって「明日架」行くよ!」「」

「あっ、うん。」

『一体何なの!?!あの人!』

明日架は心の中でそう叫んだ。

くI D O 日本支部く

「只今、戻りました。」

「「「お疲れ」」」

「知枝さん、聞いてほしい事があるんです。」

明日架が、隼人のことを話そうとした知枝ともえれんぞう廉造は、酒井や高田よりも前からIDO日本支部にいた大大ベテラン。もうすぐ定年らしい。

「どうした、明日架ちゃん。」

「実は、「ちょっと、集まってくれー。」「」

…酒井部長、タイミング良すぎです。

「えー、今日から1人増えることになった。入ってこーい！」

ドアを開けて入ってきたのは、スラッとした青年だった。

「彼は、岩城隼人くんか。まあ、知ってるやつもいるとは思いますが、ロンドン本部の岩城室長のご子息だ。」

「あつ。」

「どうした、風岡。」

「あ、いえ。すみません。」

まさかの、予想的中。

岩城隼人は、本当にIDOの人間だった。

でも、事務所に入ってきたとき、眼鏡をかけていなかったので紹介されるまで、彼が岩城隼人だと言うことに、明日架は気付かなかった。

「岩城君、一言挨拶を。」

「岩城隼人です。父のことは無いものと思って頂いて構いませんので、ご指導のほどよろしくお願い致します。」

「だそうなので、ビシバシ頼むぞ。こっちの紹介もしなければだな。右から、安藤、高田、平井、芹澤、沢口、吉川、二階堂、田上、山、池、小早川、小野田、知枝、最後にこの事務所唯一女性で最年少の、「風岡明日架」ですよね。」

「あー、よく知ってるな。あと本当はもう1人いるんだが、今猫探しに行ってるな、そいつはまたあとだ。デスクは、そのの空いてる所を使ってくれ。」

「じゃあ今日は1ヶ月後にある麻薬取引の下調べ行くぞ。なんせ警察の方は、上の圧力でほとんど情報が無いらしいからな。組むやつと行くところは、昨日渡した紙に書いてあるから、それ見て行ってくれ。」

「はい！」

「あの、部長。私は誰と組めばいいんですか？書いて無いんですけど…」

「あー、岩城と組んでくれ」

「はい。」

「よろしく。」

ちなみに、さっきの“空いてる所”とは、明日架のデスクの丁度真後ろだ。

「いちいちこそ、よろしくお願いします。」

明日架の隼人への、第一印象…この人、苦手かも。

あの人（後書き）

登場人物一気に増えましたね。

簡単な紹介は、活動報告に載せ行きます！

あと、デスクの配置とか…。

下調べ

明日架は思い出した。

それは今から1年ほど前のこと。

岩城室長が事務所に来たことがあった。

「失礼致します。コーヒーをお持ち致しました。」

「おー、悪いな、ありがとう。風岡、こちらがロンドン本部の岩城室長だ。」

「はじめまして、風岡明日架と申します。」

「はじめまして。君は今、いくつくらいなんだい？」

「はい、今年で15になります。」

「そうか、じゃあうちのやつのおつ下か。」

「おー、隼人君はもうそんな歳になりますか。なんとというか、人のうちの子は早いだな。」

「そうですね。酒井部長のご子息も大学生ですか。」

補足だが、酒井部長は既婚者であり、息子が1人いる。

「まあ、隼人君ほど優秀ではありませんがね。」

「そんなことはありませんよ。スポーツ関係の仕事に就きたいという夢を、早くから持っていたじゃないですか。そして、その目標に向けて大学へ進学した。立派ですよ。」

「恐縮です。」

「風岡君も、女性で、しかもその年で、仕事をしっかりとこなしていると聞きました。感心しますね。これからも頑張ってくださいね。」

「はい。ありがとうございます。」

岩城室長は明日架の事を“女の子”ではなく“女性”と言った。明日架の岩城室長への、第一印象は…

とても、良い人。

息子とは、大違いだった。

「またぼーっとしてるぞ。」

「あ、すみません。」

心ここにあらずの明日架を現実に戻したのは、またも隼人だった。

「あの、これから何処に行きますか？何も書いていないんですけど……」

「あー、大体は決めてある。」

「はい？」

「酒井部長に言われたの。下調べの仕方、場所は、お前が自由に決めていいって。」

「それって、お手並み拝見、ってことですよね……」

（15分後）

隼人の運転で2人はある喫茶店に到着した。そして隼人は、その店の中へと入っていく。

「えっ？ちよっと、下調べする「いいから黙ってついてこい……」」

店内には数人の客。

隼人は何の躊躇いもなくカウンターへ。

「マスター、コーヒー2つ、この間と同じミルク、多めで、なるべく最近入荷したやつ。」

『へっ？何それ、何その注文。』
明日架は心の中で呟いた。

しかし、口に出すとさつきみたいに怒鳴られそうなので黙っていた。

「はいよ。」

マスターが返事をする。

「じゃあまた今度来るから。」

そう言つて、2人の客が出て行った。

店内にはあと客が1人。

「じゃあ私もおいとましましょうかね。」

こうして、店内にはマスターと明日架たち以外、誰もいなくなった。
すると、コーヒーが出てきた。

「えっ」

明日架が驚いた理由。

出てきたコーヒーが、どちらもブラックだから。

しかも、隼人は何も気にせず飲む。

そんな明日架の動揺に気付いたマスターが、隼人に声をかけた。

「隼人、隣のお嬢ちゃんに説明してやったらどうだ？メチャクチャ困ってるぞ。」

隼人は一瞬明日架を見て、ため息を1つついてからこう言った。

「この間と同じって言うのは、そのままの意味でも使っけどもう1つ、頼んでおいたっていう意味もある。ミルクは、情報。多めはなるべく沢山。最近入荷は、最新の。」

「ってわけで、さっきのを訳すと、“この間頼んでおいた情報をなるべく最新のをくれ”って言ったの。」

そしてここは情報屋兼ただの喫茶店だ。

「コーヒーは隠語でも何でもないから、ただの注文。ご理解頂けましたか、お嬢さん？」

明日架はカチンと来たが、表に出さないように、必死で押さえ込んだ。

「ご説明ありがとうございます。」

しかし、こうやって返すのが精一杯だった。

「さっきの3人も、みんな情報を買いに来た奴等だ。」

「よくわかりましたね。」

すると、茶色い大きな封筒を持ったマスターが現れ、こう言った。

「情報屋としてのうちは、基本的に一見さんお断り。あいつらはよく来てるから。」

隼人、今日はUSBじゃなくていいだろ。」

「ああ。」

「USBでも、受け渡しするんですか？」

「ああ。喫茶店の客や、よくわかんねえ部外者がいるときは、会計の時にこっさりな。」

明日架の隣では、真剣な眼差しで資料を見る隼人。

「で、今回は何を払えばいい？」

隼人はその資料から目を離すことなく、そう言った。

「何でもいいぜ。」

「…今度の都知事選、2番手と17票差で長尾が勝つ。」

「まじか、それ？」

「ああ。」

そう言うと、資料を仕舞い、明日架に渡して、カウンターに4000円を置くと

「」馳走さん、次の目的地に着くまでにそれ、読んどけよ。」

と言って、店を出て行ってしまった。

「えっ、ちょっと待ってください！あの、コーヒーいくらですか？」

「あ、いいよ。隼人が置いてったから。ほら、早く行かないと、置いてかれるぞ。」

「あ、ご、ご馳走様でした。」

明日架はそう言って慌ただしく店を出ていった。

「隼人が同僚連れて来るなんて、初めてだよな、しかも、コーヒ

ーおごったし…」

マスターは少し嬉しそうに、そう呟いていた。

ここは、ある倉庫。

海辺の数ある倉庫のなかの1つ。

海も空も真っ黒。

ただその倉庫からは、微かに光が漏れていた。

…誰かいる。

明日架は中にいるのが誰なのか、検討がついていた。

極竜会ごくりゅうかい

さつき隼人から渡された資料に書いてあった。

今度麻薬の売買をする鷹津組たかつぐみとは、敵対関係にある。

「いいか、わかってるとは思いますが、絶対に気を抜くなよ。」

隼人が声を低くしてそう言った。

「はい。」

「行くぞ！」

2人は倉庫の中へと入っていった。

駆け引き（前書き）

話を進める都合上、どうしても避けられない表現が出てきてしまいます。

ただそんなに過激な表現にするつもりはないので、R15くらいにするつもりです。

読めなくなってしまう方がいたら、ごめんなさい。

駆け引き

倉庫の中には、若い男たちが20人ほどいた。

しかし隼人は、忍び寄るでもなく、スタスタと歩いていく。

「あ？誰だテメー！」

全員が一斉にこちらを向いた。

「ここで待ってる。」

明日架にそう言って、隼人はさらに前へ進んで行く。

「ちょっと聞きたいことがあってな。」

「んなもん、誰が答えるかよー!!」

「いいのか？お前らどう見ても未成年だよな？タバコ吸ったり酒飲んだりしてるとこ、さっき写真撮ったぞ。もしそれをサツに持っていったりしたら…わかるよな、どうなるか。」

もしこの写真の存在が極竜会の上層部にバレでもしたら、お前らの首、危ないんじゃない？」

全員黙る。

もちろん、写真なんて撮っていない。

「何を教えればいいんだ？」

1人が口を開いた。

「鷹津組の情報が欲しい。奴等が近いうちに、ヤクの取引をする」とは、知ってるだろ。」

「それを俺たちが教えたら、こっちに何のメリットがある？その、少し後ろの方にいる女でもくれるのか（ニヤ）？」

「えっ…。」

「あいにく、それはできないな。まず、この写真は消す。」

で、今やっつてることも見逃してやる。」

そして、鷹津組を一斉検挙出来るから、お前らの敵が減る。てことは、鷹津のシマをお前らの極竜会のものに出来る。」

まだ何かいるか？」

「…」

「地獄に落ちるか、生きるか、どっちがいい？」

隼人が、答えのわかりきった質問を相手にぶつけた。

もう、ここまでできたら向こうの負けだ。」

「わかった。」

写真消してくれ。」

隼人は携帯を操作し、“消去しました”の表示を見せる。勿論、全然関係のない写真を消した。

「約1ヶ月後の5月20日、横浜の倉庫でヤクの受け渡しをする。どこの倉庫かは知らない…あつ、Fなんとかって言ってたな。相手は中国マフィアだ。俺たちが知ってるのはこれだけ。」

「わかった。」

すごい、こんなに鮮やかに情報を引き出すなんて。

明日架が感心していると…

「な、一緒に遊んでかないか？ちょっとくらいいいだろ？」

1人の、明らかに酔っている男が明日架に絡んできた。

「や、めて。」

明日架がその男を振り払おうとすると、

「そーだよ、いーじゃねーかちょっとくらい。」

また別の、酔った男が来る。

2人に挟まれてた。

「いや…、やめて…。」

明日架は、動けなくなってしまった。
すると…

「だから、それは出来ないって言ったろ？」

隼人は見事に、1人の男の手を捻りあげ、もう1人の男を蹴り飛

ばした。

そして、明日架と男たちの間に立ちはだかる。

「これ以上余計なことすると、サツ呼ぶぞ。」

隼人は明日架の腕を引き、倉庫を後にした。

「だから言つたら、氣イ抜くなつ…て…」

明日架の様子がおかしい。

さつきもそうだった。男2人に挟まれた時、明日架は何もしなかった。

いや、できなかった。

「大丈夫か？」

「あ、はい、だい、丈夫です。」

「そう、か。」

悪かったな、その…」

「いいえ、大丈夫です、本当に。」

「そう、か。」

…そういえば、録音、しておいたか？」

「はい。これです。」

「じゃあ、警察にこの場所を連絡しておいてくれ、ただし、サイレンは鳴らすなつて。」

「はい。」

このあと、あの若い男たちは、あっけなく逮捕された。

（I D O 日本支部）

「戻りました。」

「……」

明日架は事務所に着くなり、何処かへ行ってしまった。

「どうした、何かあったのか？」

酒井部長が不思議そうに聞いてくる。

「いや実は……」

隼人は、今日あったことを酒井部長に話した。

「そうか…。あ、でとうだった？」

「はい。これが録音したものです。やはり中国が絡んでましたね。」

「まった、面倒になりそうだな。」

「確かに。」

「中国支部に連絡だな。んでもって、久しぶりの拳銃携帯か？」

「そうなるでしょうね。」

その頃明日架は事務所のトイレにいた。

「…バカだ。あれぐらいでフラッシュバックなんて…」

そんなんじゃ、この仕事やってらんないよ。」

（約1ヶ月後5月19日）

「えー、ついに明日だな。もう一度確認しておくぞ。」

明日の取引は21時から。場所は横浜のF・4倉庫。今回はIDO
中国支部、日本支部、そして警視庁との合同で行うことになった。
勿論、拳銃携帯。

「以上だ。皆、気を引き締めていくように！」

「はい！」

呆気なく… 藍子の悩み

「各自、車が見えた直ぐに連絡。それで、ヤクを確認できたらそく逮捕だ。いいな！」

「了解」

「了解」

「了解」

「了解」

時刻は20時ちょうど。

今はそれぞれが配置につき、犯人が来るのを待っている状態。酒井部長は少し離れたところから、指示を出していた。

それから約45分後…

1台のワゴン車が倉庫内に入ってきた。

「ワゴン車1台確認。」

誰かが連絡を入れた。

その数分後、黒塗りの車が3台倉庫に入ってきた。

「黒塗り、3台確認。」

それぞれの車から、明らかに柄の悪そうな男たちが降りてきた。

「いや、久しぶりね。元気してましたか？」

片言の日本語を話す、こっちが中国マフィア。

「こちらこそ。ご無沙汰してます。」

となるとこちらが鷹津組。

「じゃあ、早く終わらせよ。誰か来たら面倒なるね。」

そう言つて大きな旅行カバンを持ってくる。

中にはたくさん動物のぬいぐるみ。

でも、それを引き裂くと…中には白い粉の入った袋だ。

そして鷹津組の方は大金を持ってきた。

「ヤク、確認！」

「よし、全員かかれー！」

酒井部長の合図と同時に、何人もの警官と、IDOの職員が中国マフィアと鷹津組に銃口を向ける。

「動くな！」

「床に伏せろ！！」

「おとなしくしろ！」

そんなことを言っで、大人しくなるわけもなく…
乱闘が始まってしまっ。

すると1人の男が明日架の方に向かって来る。

「どけ女ー！」

手にはナイフ。

しかし明日架は動じない。

一通りの武術は教わっている。

特に合気道は。

だから…

「イテテテテー！」

「隙ありすぎ。」

刑事さん！手錠貸して頂けませんか？」

「は、はい！」

明日架たちのほうが人数がはるかに多かったこともあり、なんとも
呆気なく終わった。

逮捕後、やはり一部の代議士に麻薬が流れていたことがわかり、後日逮捕された。

〈学校〉

「おはよー…。フワア」

「おはよ、明日架。眠そうだね。」

「昨日ちょっと、遅くまでしゅ…宿題やってて。」

「そうだったんだ。」

「どうしたの？珍しく元気ないね。」

いつもは、何処からそんな元気がわいてくるんだ、と思うぐらいの藍子。

なのに今日は、凄く静かだ。

「うん…ちょっとね。」

「なんかあった？」

「実はね、江口先輩、最近同じクラスの女子とすっごい仲良くしてるんだって。周りが付き合ってるんじゃないかって思うくらい。」
なるほど、そういうことか。明日架は納得した。

「そう、だったんだ。」

「やっぱり、かずはうちなんかに興味無いのかな？」

藍子は学校以外の時は和也のことを「かず」と呼んでいる。

「じゃあ、調べてみる？」

人を調べるのは、明日架の得意分野だ。

「調べるって何を？」

「江口先輩が、その女の子のこと、どう思ってるのか。藍子に興味が無いのか。」

「は？」

「だって、知りたいでしょ？江口先輩がどう思ってるか。」

「まあそりゃ、知りたい、けど…」

「けど？」

「出来るかな？」

「大丈夫。岩城先輩もいるし。」

〈I D O 日本支部〉

「こんにちは」

「明日架ちゃんか、お帰り。」

事務所に帰ってきた明日架を知枝が向かえた。

「岩城さんは？」

「資料庫じゃないか？」

〈資料庫〉

ガチャ

「岩城さん、いますか？」

「何か用か？」

「ちょっとお聞きしたい事があるんですけど…」

「何だ？」

「あのー、最近江口先輩がよく一緒にいる先輩の事なんですけど…」

「倉木のことか？」

「あつ、倉木って言うんですか？」

「倉木梓。」

それがどうかしたか？

…あ、」

「はい、お察しの通り藍子のことです。最近江口先輩がその、倉木先輩と仲良くしてるから、自分には興味が無いんじゃないかって…落ち込んでて。」

「あれなあ…仲川さんには言うなよ？」

2週間後、仲川さんの誕生日なんだろう？その時にプレゼント渡してついでに告白しようと思ったらしいんだけど、何買っていていいかわからないから、席が近かった倉木に相談したらしい。で、どうせなら驚かせようってことになったらしい。」

「驚かせる？」

「そう。最初は誕生日を忘れてるふりして、帰りにプレゼント渡して告る。」

なんとも和也らしい告白だと明日架は思った。

「どうしようかな？」

「何が？」

「藍子に、江口先輩と倉木先輩の関係を調べてみよって、提案してしまっただんです。」

まあ、バレないように頑張ります。」

「その方がいいな。」

一応和也には、言っておく。何かあったら言え。出来ることなら協力するから。」

「お願いします。」

呆気なく… 藍子の悩み（後書き）

少し投稿が遅れてしまいました。

申し訳ありません。

テストがありました…

……… 結果は聞かないください。

藍子ちゃんの恋話になりましたね。

長くなりそうなので、次にいきます！

読んで下さってる方、ありがとうございます！

藍子と和也

（学校）

「和也、ちょっといいか？」

「おお、何だ？隼人」

「昨日風岡さんに会って、仲川さんのことを聞いた。」

「えっ、藍子のことを！？」

焦りだす和也。

「そっ、最近お前が倉木と仲良くしてるのを仲川さんが知って、落ち込んでたらしいぞ。」

「えっ、マジ？」

「マジ。だから、一応風岡さんにはお前らの計画のことは言っておいたから。」

「そっか。」

勘違いされたな、完全に。」

「その方が好都合なんじゃない？彼女も驚くだろうし。」

何処からか現れた梓が、随分と余裕そうに言った。

「何か楽しんでないか？」

呆れながら言う隼人。

「楽しんではないわよ？」

もう少しでカップル成立するところに遭遇するなんて、なかなかあることじゃないでしょ？」

「はあ。完全に楽しんでるな。で、話を戻すけど、あの2人、お前らの関係調べようとしてたらしいぞ。」

「えっ？で、どうするって？」

「今さらやめたら怪しまれるから一応調べるけど、バレないようにするって。」

「…何か大事おおいになってきちゃったな。」

「最初から大事だよ！」

「最初から大事よ！」

冷静な2人が息の合った（ハモった）突っ込みをみせた。

そのころ……

「あの先輩って、倉木梓っていうんだって。」

「そうらしいね。」

で、調べるって何をどう調べるの?」

思ったよりもその気になっている藍子に、明日架は少し困ってしまった。

「江口先輩と同じクラスの人に、倉木先輩がどんな人が、あとあの2人の関係がどんななのか聞いてみよ。」

「じゃあ、倉木先輩と仲のいい人に話を聞けばいいんだよね。」

「それはダメ。」

「何で?」

「先輩に親しい人に聞いたら、私たちが調べてるのバレちゃうですよ?」

「じゃあどうするの?」

「何日か調べて、同じクラスでも普段行動を共にしていない人に聞くの。」

「なるほど!じゃあ、早速行こ!」

「えっっ?い、今から?」

「数日後の昼休み」

何日か調べて、話を聞く人を決めた。

「あー、お聞きしたい事があるんですけど…」

「何か？」

不思議そうな顔をして、藍子の問いかけに答える。山本あかり先輩。

「私、1年の風岡と言います。こちらは仲川さんです。それですね、倉木先輩の事についてお聞きしたいんですけど。」

「梓ちゃんの事？」

「はい、どんな方ですか？」

「すごくいい子だよ。大人っぽいけど面白い人だし。」

「そうなんですか。あと、江口先輩との事なんですけど、お二人は、仲いいですね。」

「うん、そうみたいだね。あ、でもあの時…。あいや、うん、仲いいね。」

「？、そうですか。ありがとうございました。」

藍子は、最初以外ほとんど喋っていなかった。

「やっぱり、仲いいんだね、あの2人…」

「仲がいいのと、好きは別でしょ。」

「でも、山本先輩何か言いかけて、止めてたじゃん。」

「うん。何だったんだろっね、あれ。まあもう少し調べてみようよ…」

「うん…」

完全に気を落としてしまった藍子だった。

その後…

「梓ちゃん、さっきびっくりしたよ。」

「どづしたの？」

「風岡さんと、仲川さんに梓ちゃんと江口くんのこと聞かれてさー。」

「

「あー、えっ言っちゃった？」

「言っていないよ！言いそうにはなったけど、そしたらこの間話してたサプライズ、台無しになっちゃうと思って。」

「うん。ありがとね。」

「大丈夫だよ。成功するといいね！」

確かになあかりは気を遣った。

しかしそれは、藍子ではなく、和也たちであった。

「結局わかったのって、倉木先輩が、いかに大人でいい人かってこ

とだけだったね。」

藍子が呟くように言った。

「確かにね。」

梓への印象は、誰に聞いても悪いところは一つも出てこなかった。付き合っているかどうかについては、曖昧すぎてよくはわからなかった。

まあ、明日架にとってはその方がよかったのだが…

～火曜日～

ついに3日後は藍子の誕生日である。

その日は、天気予報がことごとく外れ、まさに、バケツをひっくり返したような、大雨だった。

明日架が教室に着くと、何人かの生徒が藍子の机を取り囲んでいた。

「どっかしたの?」

明日架がその中の1人に声をかける。

「あ、明日架ちゃんおはよう。なんか藍子がね、さっきからずーつと泣いてるの。」

「えっ!?!」

見ると、椅子に座って泣いている藍子がいた。

「どうしたの? って聞いても、答えてくれなくて……」

「藍子、何があつたの?」

明日架がそう聞くと、立ち上がった藍子が明日架の腕を引っ張り、人の少ない所へ連れて行った。

「実は昨日友達と、駅前にあるデパートに行ったの。そしたらね、そこに……か、かずがいてね……一緒に、倉木先輩がいたの。」

理由つけて、友達と別れて、2人の後について行ったの。

そしたらね……そしたら、宝石店に入って、2人で楽しそうに……何か選んでたの。

……。
うち……もうダメだ……。」

そう言って泣き崩れてしまった。

和也と梓と一緒にいた理由を、明日架はわかっていた。しかしそれを、藍子に言うわけにはいかない。

明日架には、かける言葉が見つからなかった。

（I D O 日本支部）

「お疲れ様です。」

「お帰り、あすかちゃん。」

いつも通り知枝が明日架を迎えた。

「岩城さんは？」

「まだ来てないみたいだな。」

するとドアが開き、隼人が入ってきた。

「あっナイスタイミングです、岩城さん！ちょっとよろしいですか？」

「？」

「なるほど。仲川さんは、昨日2人を見て、完全に失恋したと思ってる訳だな。」

「はい。」

「倉木に電話しよう。このままだと、最初の計画だと無理だろ。」

確かにこのままいけば、誕生日に和也が藍子に話し掛けることすら難しくなる。

「あ、もしもし倉木か？あー。お前ら昨日、プレゼント買いに行っただか？ああ、その時仲川さんに見られてたらしいぞ。ああ、ああ、うん……わかった。」

「計画変更だとさ。電話じゃ面倒だから、直接会おうってことで。」

「岩城くんの言う通り、確かにこのままだと失敗するわね。何か仕掛けをしないと……」

近くのファミレスで話すことになった、明日架と隼人と梓。
和也は部活があつて来れなかった。

「要は、和也と仲川さんが2人で話せる機会を作ればいいんだろ？」

「何らかの方法で藍子を1人にして、それで江口先輩と会わせれば
いいんじゃないですか？」

「そう！それよ！！それだわ！！！！」

「「びつくりしたー。」」

こうして何とか、対策は整った。

藍子と和也（後書き）

すみません、中途半端なところで終わってしまっ…。
ただ、最後まで書いてしまうと、バカみたいに長くなってしまうの
で、こんなところで切ってしまいました。

本当にすみません。

藍子と和也(2) (前書き)

ついにクライマックスです！

藍子と和也(2)

〔金曜日 藍子の誕生日〕

「藍子、お誕生日おめでとう。」

明日架が藍子にプレゼントを渡す。

「ありがとう。」

やっぱりいつもよりも元気の無い藍子。

「…ねえ、今日放課後暇？」

「うん。何で？」

「パーツと遊びにでも行かない？」

「…うん！行こー！！」

こうして計画は始まった。

明日架と藍子はカラオケに行ったり、プリクラを撮ったり、買い物

をしたり、とにかく遊んだ。

「あー、疲れた。藍子、そのベンチで休まない？」

「いいよ。」

「飲み物買ってくるよ。何飲みたい？」

「じゃあ、オレンジジュース。」

「りょーかい。」

そう言って、明日架は何処かへ買いに行った。
すると…

「藍子。」

何処からか、藍子を呼ぶ声が聞こえた。
辺りを見回すと…
和也がいた。

「なん…で…。」

驚きのあまり、立ち上がる藍子。

「実は、藍子に…言わなきゃいけないことがあって。」

「ああ、倉木先輩と付き合い始めたんですよ。おめでと。」

「倉木とは付き合っただけだよ。」

「じゃあ、何でこの間2人で買い物してたのよ!?!」

「それは、これを買に行っただけ。」

和也は藍子に、細長い赤いラッピングのしてある箱を差し出した。

「誕生日おめでとう、藍子。」

ポカンとする藍子。

「んでもう一つ。」

「…もしよかつたらさ、付き合っただけじゃない?」

「ま、ま、ま、待って!?! 状況がぜんぜんわかんないんだけど…
まず、付き合っただけなのに、何で倉木先輩と一緒にいたの? なんて
2人で買い物なんかしてたの? 最近、急に倉木先輩と仲良くなった
のはなんで? 大体、なんでここに居るの?」

「いっぺんに色々聞きすぎだよ。」

何買っただけかわかんなかったんだよ、プレゼント。だから、席隣
だった倉木に相談したの。

開けてみるよ、それ。」

そう言われて、箱を開け始める藍子。

すると…

「ネックレス？」

箱の中には、ハートのネックレス。ネックレスには、小さな透明の石が付いていた。

「これ、本物？」

「そう。ちつちえーダイヤ。それが俺の財力の限界。」

「いやでも、これでも十分高いですよ。」

「実は、この間行った店は閉店セールで安かったんだよ。それプラス、倉木の親がその系列店で働いてて、少し安くしてもらったんだ。」

俺は、倉木とは付き合っていない。ただ、俺さ、告白とか、よくわかんなくて…。だから、倉木に相談したんだ。」

「ほ、本当に？」

半泣きの藍子に、和也は優しい顔をした。

「もう一回言っぞ…。」

俺と付き合ってくれますか？」

藍子は半泣きどころか、普通に泣いてしまい、頷くことしかできなかった。

「フフ…。泣くなよ。」

和也はそう言って、藍子のことを優しく、そつと抱きしめた。

「ま、ウ…まだ…、全部…、ハア、全部答えてないよ、かず？」

「え？」

「なんでここにいんの？タイミング良すぎでしょ。」

「あゝ、それはー…「私たちが計画したことよ！」」

和也が口ごもってしまったところで、梓が出てきた。

その後ろからは、隼人と、オレンジジュースを持った明日架。

「倉木先輩…。えっ？岩城先輩と明日架も？」

「あの3人に協力してもらいました…。」

申し訳なさそつに言う和也。

「ごめんなさい、藍子ちゃん、辛い思いさせちゃって…。でも、安心して！本当にただ相談にのってただけだから。ちなみにそのネットワークスも、最終的には江口くん本人が決めたしね！」

「藍子、私もごめんね。騙すようなことして…。でもね、話聞いたら、江口先輩が本気なのがすぐわかったの。だから…。」

「うっん、ありがと、明日架。倉木先輩も、ありがとございます。」

「和也、こんだけ色々な人巻き込んで成功させたんだから、他の女

に目移りなんかしたら、ただじゃおかねえぞ。」

「わかってるよ！てゆうか、目移りなんかしねえよ！！」

「じゃあ、私たちは早いとおおいとましましょうかね。」

梓がニヤけながらそう言った。

「藍子、オレンジジュース。2本買ってきたから2人で飲んで。」

「本当にありがとう、明日架。」

明日架も、好きな人ができたら、教えてよ？」

「…わかったよ。じゃあね！」

「じゃあ、私こっちだから、また明日、岩城くん。」

「ああ…。」

「良かったです。成功して！！」

「そうだな。」

「何か、羨ましくなっちゃいました。」

「好きなやつでもいるのか？」

「いませんよ！そうじゃなくて、彼氏ができるってなんかいいなって思っで。」

「じゃあ、彼氏作ればいいだろ？」

「私には…、彼氏はできません。絶対に。」

「何で断言できるんだよ。」

「色々あるんですよ。」

この時の明日架は、どこか遠くを見ていて、とても悲しそうなお目をしていて。

そしてそのことに、隼人も気付いていた。

歓迎会

「IDO日本支部」
ある日の夕方。

「そう言えばよ、まだ岩城の歓迎会してねえな。」

酒井部長がまたもや唐突に言い出した。

「歓迎会なんてあるんですか？」

隼人が聞く。

「誰かがこの事務所に来るたびに、歓迎会をするんですよ。」

明日架が楽しそつに答える。

「なら、今日にでもやるか？」

「おお、いつすね!」

「あんまり遅くなると店も混むだろうから、もう行こう!」

「そつすね、行きましょ!」

何故か主役以外の人たちが、大盛り上がりのなか、IDO日本支部一行は、お店へと向かった。

居酒屋 月の夜

一行は、歓迎会を行う時は必ず来る「月の夜」と言う居酒屋に来ていた。

「何で歓迎会の主役が未成年なのに、居酒屋なんでしょうね？」

明日架が呆れながら隼人に言うと

「酒飲む口実がほしいんだろ。」

と、こちらも呆れながら答えた。

「わかってんじゃねえか、隼人。安心しろ！この店は酒も料理も絶品だ。」

酒井が楽しそうに話す。

お酒が飲めるからなのか、酒井はかなり上機嫌

「うん、確かにうまいですね。」

店に入って、適当に注文。

出てきた料理を早速食べ始めた隼人の一言であった。

「だから、言っただろ。そっか、この店の名前の由来知ってるか？」

「あゝ、お俺知ってますよおゝ！このみ…」

バシン！！

「イッツター！！」

酒井が石川の頭をおもいつきり叩いた。

「《月の夜》の由来は、ここの大將が店を開ける前の日の夜、綺麗な満月が出ていたそうだ。だから急ぎよ、月の夜にしようだ」と

痛がっている石川を完全無視して、満足げに話す酒井。

「そうなんですか。」

興味があるのだから無いのだから、よくわからない言い方をする隼人。
…おそらく、興味は無いのだろう。

「よし！じゃあ改めてメンバーの紹介でもするか！」

そう言っつて酒井は紹介を始める。

「まずはお前の隣に座つてる、ともえれんぞう知枝廉造大先生、今年で60だ
入所して…40年位になりますかね？」

「おお、もうそんなに経つのか！」

当の本人が何故か一番驚いている。

「だってそうじゃないすか。俺や高田さんよりも前からいるんだか

ら

「まあ、それもそうだな」

「次、高田伊知郎たかだいちろう今年で54でしたっけ？
入所して31年。最初の1年以外はずっと日本支部にいる。
なのに、なんで管理職に就いてないと思う？」

酒井が隼人に問題をだす。
数秒考えた結果…

「出世に興味が無かったとか。」

「ご名答！流石だな隼人！！そつ。この人は管理職なんざ面倒なだけだ！って言つて全部昇進を断つたんだ。」

「だつて、本当に面倒じゃねえか。」

高田が、ビール片手に面倒くさそうに言った。

「まあまあ。」

で、そつちにいるのが安藤雄作あんどうゆうさく44歳。
入所して21年くらいかな。

俺が前にアメリカにいたときの部下だ。
去年の人事で日本に呼んだ。
優秀なんだぜ。」

「よろしく、隼人君。」

「よろしくお願いします。」

「お次が松山要次と芹澤明雅、2人とも39歳で、入所して16年だ。」

松山は芹澤を、いつもばかにしてはいる。芹澤は、ちょっと子供じみてるところがあんだよ。

でも、お互い実力は認めている。

松山は、2年前までドイツに、芹澤は、1年前までイタリアにいた。

「ちよ、ぶちよ、子供っぽいなんで、酷いじゃないすか。」

芹澤が異義を唱えると、松山がすかさず…

「情報収集の途中に、偶然会った子供と遊び始めるやつのが人が大なんだよ！！」

「ハハハ、だいたいいつもこんな感じだ。」

で、そっちにいるのが吉川浩二と、平井正平35歳。入所して12年。

吉川と平井は中学、高校の同級生だったらしい。

IDOに入って最初に配属されたオーストラリアで再会したんだと。吉川は1年前に、平井は2年前に日本に来た。」

「「よろしくな。あつ、」」

「こいつらは、よくハモるんだよね。」

で、その隣が沢口孝文32歳。入所して9年だ。

平井と吉川によくいじられてる。

オーストラリアにいたんだが、1年前に吉川と一緒に日本に来た。」

「部長、いじられてるのわかってるんだったら、助けて下さいよ！」

酒井に助けを求める沢口だったが

「やだ、楽しいから。」

あっさり拒否。

「沢口の隣が、小野田隆司30歳だったか？入所して7年だな。以前はオーストラリアにいた。」

池幸太郎30歳。

小野田と同期だ。

以前はフランスにいた。

小野田と池も、1年前に日本に来た。」

「よろしくね、隼人君！」

「よろしく。」

フレンドリーな小野田と、クールな池。

さっきの松山と芹澤もそうだったが、とても同い年には見えない。

「次が二階堂勤28歳。入所して5年。

父親は大企業の社長なんだが、あえてIDOに入ったらしい。」

1年前までイギリスにいた。
つてことは、岩城、お前知り合いか？」

「はい。お久しぶりです。」

「久しぶりだね、岩城君。また君と仕事ができるなんて、嬉しいよ。」

「こちらこそ。」

「次いくぞー。」

田上健介27歳。入所して4年
1年前までアメリカにいた。」

「よろしく、岩城君。噂通り、かつこいいんだね。」

「田上は噂が大好きで、噂に関してこいつの右に出る者はいない。」

次が、小早川宗治26歳。入所して3年。

石川の大学時代の先輩だ。

石川をIDOに誘ったやつだ。カナダに1年前までいた。

で、その石川卓也25歳。入所して2年。

2ヶ月前まで、小早川と同じカナダで仕事していた。

実力はあるが、やたら猫探しがうまいんだよなあ。」

「それ、誉めてます？」

石川が酒井に聞くと…

「…うん。」

まあ、それは置いておいて、最後は事務所の紅一点…え？」

歓迎会（後書き）

申し訳ありません！変なところで終わってしまって…

次回続きを書きます。

そして、次のお話で明日架のことが、すーすーすーただ出てきます！
少しですよ？

歓迎会(2)(前書き)

前回の続きです。

酒井が明日架の事を紹介しようとする時…

一体何が!?

歓迎会（2）

「何で寝てるんだ？」

酒井が明日架の紹介をしようとした時、明日架が隣にいた隼人の肩にもたれかかって寝ていた。

「さー。」

…もしかして」

隼人は、そう言って明日架が飲んでいた烏龍茶を一口飲むと…

「これ、烏龍茶じゃなくて、ウイスキーじゃないですか…？」

他の人のウイスキーの水割りを明日架が間違えて飲んでしまったよ
うだ。

「でも、ほとんど無くなってないよ？」

石川がグラスを見つめる。

「相当酒に弱いんですね。」

「そーいえば、岩城、お前今飲んだか？」

酒井が、まさかと思って聞いてみると…

「飲んでませんよ。直前でやめました。」

「おつ、偉いな。」

隼人は明日架を寝かせ、自分が持っていたジャケットかけた。そして、少しの間明日架を見つめると…

「知枝さん、一つお聞きしたいことがあるんですけど。」

「ん？」

周りの人間は既に別の話題で盛り上がっている。

「風岡って、昔、何かありましたよね？」

「それを教えろってか？」

知枝がいつもは見せないくらいの険しい顔をした。

「いいえ。風岡の過去を知ろうとは思いません。」

「じゃあ、お前は何か聞きたいんだ？」

「その過去によって、風岡がどのくらいの“傷”を負ったのかと思
います。」

「“心の傷”ってことか？」

「はい。」

「それを知って、お前はとうするんだ？」

「もし、もし仮に何かあった時、何か出来るかも…いや、何も出来ないかも知れませんが、少なくとも慌てふためくことは無いようにしたいので。」

知枝の顔が少し優しくなった。

「なるほどな。じゃまあ、ちょっと教えてやるか。」

お前の言う通り、明日架ちゃんは昔ある事件に巻き込まれた。その後も大変な思いをしてな。でも、IDOが関わったことで、何とか明日架ちゃんをその状況から助け出すことができた。」

ここまで言って、知枝がまた険しい顔をした。

そして、少しためらった後ゆっくりと話し出した。

「だが、その後に明日架ちゃんは…5回、自殺しようとした。それも生半可なものじゃない。3回は何とか未然に防いだが、後の2回は…その…生死の間をさまよったと言うかな…。本当に危険な状態に陥った。」

隼人は言葉が出なかった。

5回もの自殺未遂。

そのうちの2回は、未遂では終わっていなかったかもしれない…

そして、もう一度寝ている明日架を見つめる。

「そう…だったんですか。」

もう1つだけ聞いてもいいですか？」

「ん？お前、さっき1つって言ってなかったか？
まあいいが、何だ？」

「すみません。」

日本支部の人たちは、風岡の過去を知っているんですか？」

「知ってるのは、部長と高田と俺だけだ。さっきの紹介通り、ほとんどが去年の大規模人事でこっちに來たやつばかりだ。2年前からいるやつも、ちょうど、この件が片付いてから來たからな。」

「なるほど。」

「どうだ？ちつとは参考になったか？」

「はい、ありがとうございます。」

「何だ？急に元氣無くなつたな？」

「5回もの自殺未遂の話聞いて、明るくしていただける方がおかしいですよ。」

隼人に苦笑いしながら、答えた。

「まあ、確かにな。」

それに、想像出来ないよな。」

今隣で無防備に熟睡してる女の子が、何度も自殺しようとしてたなんてよ……」

お酒を口に運びながら、知枝が言った。

「俺がお前に色々とお教えたこと、部長に言っなよ？」

「わかってますよ。」

「さーて、2次会行くか!？」

お酒でだいぶ気分が上がってきた酒井。

「部長、風岡どうしますか？」

少々呆れながら隼人が聞く。

「んー。この店に、一晩おいてもらうか!?!」

酔っている酒井の一言に店の大将は…

「いやいや、酒井さんそれはちょっと…」

「いいじゃん、いいじゃん、また来るから!」

完全に酒井のペース。

にぎやかな夜はこの後も続いた。

《おまけ》

「次の日の朝」

「フワアアア、良く寝た……頭痛い……って、ん？……」

朝から大混乱の明日架だった。

歓迎会(2) (後書き)

烏龍茶と間違えて、ウイスキーを飲んでしまった話は…実話です)
。□。;

葉瑠衣が小さい頃にやらかしました) ;)

全く覚えていませんが、その後、良く寝ていたそうです(^| ^;))

以上!余談でした!

ありがとうという言葉

〈学校 1-C教室〉

「おはよ!」

いつも通り元気な藍子が明日架に声をかけてきた。その表情はどこか嬉しそう…

「おはよ、藍子。何か嬉しそうだね。」

「フッフ、わかる？」

実は昨日ね、かずとデートしてきたの!もう、本当に楽しかったんだ!

「へえ、よかったね。」

「まあこれも、明日架のお陰だね!」

「私の?何で?」

「だって、明日架がかずの手助けしてくれなかったら、うちらダメだったかもしれないし。本当にありがとうね!」

明日架は少し、不思議な気持ちになった。

その頃3 - Aでは…

「何ニヤけてんだよ、和也。」

「お、おお隼人。」

別にデート行ったからって、ニヤけてなんかないぞ?」

やたらテンパる和也。

「へー。行ったんだ、デート。」

「あつ、いや…はい、行きました。」

「で、どうだったんだ?」

「いや〜、まあとりあえず、手を繋ごうと思ったわけだ…でも、」
なかなか出来ないと。」

「えっ」

和也が話している最中にいきなりしゃべり始めた隼人。

「で、どうしようか迷ってる間に、仲川さんの方から手を繋いできた、とまあ、こんな感じか?」

「うっ…。見てた?」

「見てるわけねえーだろ！分かりやすいんだよ、和也は。」

「もう、ビビったよ。まさか藍子の方から手繋いでくるなんて思わなかったからさ。」

和也は、幸せそうに話していた。

ふと、何かを思い出したようで、隼人に向かって話始めた。

「藍子さ、言ってたよ。俺と藍子が付き合ってるのは、倉木や隼人や明日架ちゃんのお陰だって。特に明日架ちゃんには感謝してるみたいで、今日お礼言っつて言ってた。」

「そっか…、きつと風岡さん、喜んでるな。」

「えっ?」

「人に礼を言われて、喜ばないやつはいないだろ。」

この時の隼人は、少し違った事を考えているようだった。

「岩城、風岡ちよつと来い。」

酒井から呼び出された2人。

「お前ら2人には、これを担当してもらおう。」

そう言って渡された資料には、依頼人の情報や、依頼内容が書かれていた。が、ほとんど何も書いていない状態だった。

「鈴木剛三氏。すずきこうじ68歳。有名会社の名誉会長。

話によると、探し物をしてほしいらしいぞ。」

久しぶりの普通の探偵らしい仕事だ。

「探し物って?」

明日架が酒井に聞くと…

「知らん!!」

「その探し物ってどの辺りに?」

隼人が酒井に聞くが…

「知らん!!とにかく、行って、本人に聞いて来い。」

何故か、機嫌の悪い酒井だった。

（鈴木邸前）

「おつきいですね。」

明日架と隼人の目の前には、大きな鉄製の門。その向こうには大きな庭。さらにその奥にこれまた大きな洋館がある。

「名誉会長には、相応しい家だな。」

そう言って、とりあえずインターホンを押す隼人。

『はい。』

インターホンから、女性の声が聞こえてきた。

「IDO日本支部の者ですが、鈴木氏からご依頼を受けて、こちらへ参りました。」

『…わかりました、門を開けますので、お入りください。』

数秒後、独りでに門が開いた。

庭は手入れが行き届いていて、中央に噴水があった。

「こんなところ来るの始めてです。日本じゃないみたい。」

目を輝かせいる明日架に隼人は

「仕事で来てるんだぞ。」

一喝…。

噴水の脇を通り抜け、やっとのことで玄関扉までたどり着くと、1人の女性が出てきた。

「ようこそお越しくできました。わたくし、ここで使用人を勤めております、河野鈴と申します。旦那様は2階の書斎におられます。こちらへどうぞ。」

声からして、先ほどインターホンに出た女性のようだ。

洋館の中は、こちらも綺麗に掃除されており、玄関を入った目の前に立派な階段があった。

そこを上がって突き当たりの部屋が、書斎のようだ。

コンコン「失礼いたします。旦那様、IDOの方がおいでになりました。」

「入れ。」

ガチャ

「やあ、ようこそ。悪いね、あんな長い距離を歩かせてしまって。」

部屋の中には、優しそうな老人、鈴木剛三がいた。

「はじめまして、私岩城隼人わたくしと申します。こっちは、風岡明日架です。」

「はじめまして、風岡です。」

「よろしく。岩城というと、ロンドンの岩城室長の息子かね？」

「はい、父をご存じなのですか？」

「ああ、以前何度か世話になってね。まあ2人とも、座ってくれ。」

「じゃあ本題に入ろうかね。」

そう言つて、鈴木はゆっくりと話し出した。

「3ヶ月前に、私の妻が亡くなつてね。その妻が持っていたオルゴールだけが何故か見つからないんだよ。」

家には今、私とそこにいる河野君だけでね。私は足が悪いし、河野君だけではこの広い屋敷の中を探すのは限界がある。心当たりは探したんだかね。」

そこで、君たちを呼んで、効率よく探してもらおうかと思つたんだ。もし、他に込み入つた仕事があるのなら、依頼は受けてくれなくても構わない。でも、もしよかったら、探すのを手伝つてほしいんだ。あのオルゴールは、私にとつてとても思い入れのあるものなんでね。」

鈴木がひとしきり話すと、ニコツと笑つた。

「どうだね？受けてくれても、受けてくれなくて、どちらでもいい

のだが……」

最初に口を開いたのは明日架だった。

「私は、今は特に込み入った仕事は無いので、お手伝いできます。」

「私も同じです。」

隼人も賛同した。

「そうか、ありがとう。」

明日架はまた、不思議な気持ちになった。

ありがとうという言葉（後書き）

また、長くなってしまい、2つに分けました。

申し訳ありません…

ありがとうという言葉(2) (前書き)

またまた前回の続きです。

お楽しみください！

ありがとうという言葉(2)

「取り敢えず、奥様がよく居らした場所など教えていただけますか？」

隼人が鈴木に聞くと…

「妻がよく居たのは、妻の部屋だがねえ。そこは一度探したが。」

「そうですね。何か手がかりがあるかもしれないので、部屋を見たいのですが、案内していただけますか？」

「ああ、わかった。」

「風岡は、河野さんと他に心当たりのあるところを探してくれ。」

「わかりました。お願いします。河野さん。」

こうして、二手にわかれて探すことになった。

「奥様は、どんな方だったんですか？」

「とても優しくてね、気は利くし、何の申し分の無い妻だったよ。」

「いい方だったんですね。探しているオルゴールには、どんな思い

入れが？」

「私と妻が海外に行った時、新婚旅行というやつだね。私がプレゼントしたものだよ。バラの花束と一緒にね。妻が、亡くなる直前に『新婚旅行、楽しかったですね。』と言ったんだ。それを聞いて、どうしてもオルゴールを見つけたくくなってね。妻と私が共に生きてきた証のようなものだからね。」

鈴木が、呟くように話した。

「そうだったんですか。
必ず見つけだしましょう。」

隼人の言葉に、鈴木は頷いた。

その頃、明日架と河野は…

「奥様が、ご自分のお部屋以外によく居らしたところはありますか？」

「居らしたというか…奥様は、植物がお好きで、庭の手入れもよくなさっていました。」

「あのお庭を？」

「はい、行ってみますか？」

2人は庭へ出ることにした。

「お元気な時は、先ほど申し上げた通り、お庭や温室の手入れをなさったり、お庭で読書をなさったりしていたんですよ。」

「温室があるんですか？」

「はい、中庭に。色々な植物を育ててらっしゃいました。」

「見せて頂くことって、出来ますか？」

「はい、こちらへどうぞ。」

（30分後）

「何かわかったか？」

戻ってきた明日架に、隼人が聞いた。

「いえ、これと言って特には。そちらは何かわかりましたか？」

「いや、部屋を探してはみたが、手掛かりは何も。まあ、しいて言えば、鈴木氏がオルゴールを探している理由ならわかった。」

隼人はさつき鈴木から聞いた話を明日架に話した。

「オルゴールと、花束を。素敵ですね。…花束って、バラの花束ですよね？」

「ああ。」

「河野さん、温室！」

「えっ…。あつ！！」

明日架と河野はどこかへ走って行った。

〈数分後〉

「鈴木さん、ハアハア、これですか？」

戻ってきた明日架の手には、古い箱のような物があった。

「ああ、それだよ！でも、どこに？」

「温室です。」

実はさつき、温室に行ったんです。その時。バラだけが、他の植物とは少し離れたところにあっただんで、ちよっとおかしいなと思いましたが。それで、さつきのプレゼントの話聞いて、もしかして思っただけじゃありませんか！」

「そうだったんですか。」

「でも、最初に行った時は、気付かなかったのか？」

「実は、土の中に入っていたんです。袋を3重くらいにして。」

「なるほど。」

オルゴールに何か挟んでありますね。カードみたいな。」

オルゴールの蓋との間に、カードのような物が挟まっていた。

鈴木はそれを引き抜き、カード見た瞬間…一粒の涙が頬のぬらした。そしてそれを、明日架と隼人に渡した。

《もし寂しくなったら、このオルゴールを鳴らしてください。私はずっと、あなたのおそばにいます。》

カードには、こう書かれていた。

「本当に素敵な奥様ですね。感動しました。」

明日架が嬉しそうに言った。

「ええ、私は本当に良い妻を持った。
2人とも、本当に、本当にありがとう。」

「いいえ。見つかって良かったです。」

明日架はまたあの、不思議な気持ちになっていた。

礼を言われると、不思議な気持ちになる。

明日架はだんだん、この気持ちがなんなのか、わかってきたような気がしていた。

〈I D O 日本支部〉

「お疲れ様です。」

明日架と隼人が事務所に戻ってきた。

「おお、風岡、報告書書け！」

酒井のめんどくさそうな一言。

「はい。」

「探し物とやらは見つかったのかい？」

知枝が明日架に聞いた。

「はい、無事見つける事ができました。」

あつ、一つ知枝さんに聞きたい事があるんですけど。」

「何だ？」

「私、友達や鈴木さんにお礼を言われた時、不思議な気持ちになっ
たんです。それと一緒に、何か生きてて良かったって思ったんです。
これって、いいことなんですよね？」

「…ああ、とても良いことだと思うよ。」

それを聞くと、明日架はフワツと笑顔をうかべ、報告書を出すと

「お疲れ様でした！お先に失礼します。」

と言つて、事務所を後にした。

「良かったですね、知枝さん。風岡に、生きる理由が見つかって。」

隼人が知枝に言った。

「ああ…え？何でそれを？」

知枝は驚いた。

「あの年でここにいてること、そして自殺未遂の話から考えればわかりますよ。風岡に、何らかの生き甲斐を見つけさせるために、ここに置いてるんですよね？」

知枝は少し笑うところだった。

「お前はすごいな。」

ああ、その通りだよ、良かったよ。

本当に…良かった。」

家族というもの（前書き）

今回は、高田さんが出てきます！
この間の歓迎会の紹介はごちゃごちゃしてたので、ちょっと紹介します。

たかだいちろう
高田伊知郎

54歳。入所して31年。

最初の1年以外は日本支部にいる。

本人は出世に興味が無く、この年になっても、管理職にはついていない。

本人いわく、

「だって、本当に面倒じゃねえか。」

こんな人です。

ちなみに、酒井部長の先輩です。

ではごっごぞー！

家族というもの

ある日の夕方。

ガチャ「こんにちは」

I D Oの事務所に1人の女性が入ってきた。
その女性の足元には、小さな女の子。

「あつ、お久しぶりです!!!」

明日架がその女性に近づいて行った。

「久しぶりね、明日架ちゃん。少し大人っぽくなったわね。」

「そうですか？」

元気だった？奈央ちゃん。」

「うん！明日架お姉ちゃんも元気？」

奈央ちゃんと呼ばれた女の子は、明日架の問いかけに、元気良く答えた。

「うん、元気だよ。」

「風岡、どちら様だ？」

完全に話に置いていかれている隼人が、明日架に聞いた。

「あ、岩城さんは、はじめてですよね。
酒井部長の奥様と娘さんです。」

「あつ。」

はじめまして、岩城と申します。」

「ああ、あなたが岩城君ね。夫からよく話を聞いています。とても優秀だって。」

はじめまして、酒井の妻の冴子さへこと申します。この子は娘の奈央です。奈央、お兄ちゃんにご挨拶なさい。」

「はじめまして、奈央です。パパがいつもお世話です。」

“お世話になっていきます”と言いたかったのであろう。

そんな奈央と目線を合わせるように、隼人はしゃがんで…

「岩城隼人です。」

こちらこそ、お世話になってます。
小学生？」

「うん！1年生！」

「そっか。」

しっかりしたお嬢さんですね。」

隼人が冴子に向かって言った。

「フフ、最近は大人の真似ばかりしてるのよ。」

冴子が微笑んだ。

「そっか、奈央ちゃんは、もう1年生か。
で、今日はどうされたんですか？」

明日架が本題に入った。

「あ、特に用事があったわけじゃないんだけどね。近くまで来たから、皆さんにご挨拶しておこうと思ってね。あと、差し入れ！」

明日架に手渡された紙袋の中には、有名なお菓子屋さんのマドレーヌが入っていた。

「うわ、美味しそう！ありがとうございます。私、この店のお菓子大好きなんですよ！」

部長はもう少ししたら、戻ってくると思いますよ。」

「そう。でも、もう帰るわね。ここにいても、お邪魔なだけだろうし。」

冴子はそう言って、奈央の手をひき、帰ろうとすると...

「え〜。奈央、パパに会いたい！」

「ダメよ、我が儘言っちゃ。パパが困っちゃうでしょ？」

「はあい。」

それじゃあまた、と言って、2人は事務所から出ていった。

「冴子さんって、本当にいい人なんですよ。」

明日架が冴子たちが出ていった、扉を見つめながら言った。

「確かに、いい人そうだったな。」

「はい。でも、それだけじゃないんです。よくいるじゃないですか、仕事でなかなか家に帰れない夫に、腹を立てている妻。でも、冴子さんは違っんです。」

“夫は、私たちのために危ない仕事もしてくれている。だから私は、夫に心配をかけないように、家や娘を守るんだ。”

冴子がよく、まわりに言っている言葉だ。

「なるほど。確かにいい奥さんだな。」

「はい。」

いやでも、岩城さんが子供好きだったとは、驚きました。」

「ロンドンにいた頃、近所に小さい子供が沢山住んでたから、慣れた。」

へえ〜と言いながら、明日架はデスクに戻っていった。

〽数日後〽

この日は、酒井の様子が明らかにおかしかった。仕事も手につかないようで、その辺をウロウロしたり、何度もコーヒーを飲んだり。とにかくおかしかった。

「部長、何かあったんですか？」

明日架が、知枝に聞いた。

「さーねー。」

知枝は、興味無さそうに答えた。

「報告書です。」

ちょうどその時、隼人が酒井に報告書を出した。

「お、おお、そこ置いとけ。」

「どうかされたんですか？」

「い、いや、別に。」

酒井は否定した。

しかし、それに納得できない明日架は、酒井に声をかけた。

「部長、今日の部長、おかしいですよ？どうかされたんですか？」

「いや、だから、何も無いって。」

それでもまだ否定する酒井に、今度は高田が声をかけた。

「部長よお、いつも冷静な部長がおどおどしてると、皆落ち着かないんだよ。何かあったなら、はっきり言え！」

さすがに、高田にまで言われてしまうと、黙っていることができなくなったらしく、仕方なく話始めた。

「実はだな…冴子が奈央を連れて…出ていった。

荷物も持っていつててな、食卓に、離婚届と結婚指輪と置き手紙があつて…。その手紙には

《あなたは何も悪くありません。こんなことになってしまって、本当に申し訳ありません。》

って書いてあつたよ。」

はあくつとため息をつくつと、もういいでしょ。と言いながら、酒井は仕事に戻つた。

家族というもの（後書き）

最近、1回で話が終わらなくなってきました。

葉瑠衣の文章力の無さ故です。

申し訳ありません（TOT）

今後、話の都合上、もっと長くなることもありますが、そのあたりはご容赦ください。

ご意見、ご指摘、ご感想お待ちしております。

家族というもの(2) (前書き)

前回、補足を入れるの忘れえました。

以前、酒井部長には大学生の息子がいるという話を書きました。

そしてさらに、娘もいます。

兄妹の歳が、若干離れ過ぎてるのは…多目に見てください(T-T)

家族というもの(2)

「あの冴子さんが？」

明日架は、そんなことあるわけがない、とでも言いたげな顔をしていた。

酒井といえば、割りきって仕事をしているように見えるが、実際はそうではなく、ほとんど手についていない。

「部長、いくらなんでもおかしいだろうよ。冴子ちゃんが何も言わずに出て行っちまうなんて。」

高田が言っても、真面目に聞く様子は無い。それどころか…

「どうせ、仕事でほとんど家に帰らない俺に、愛想つかしたんだろ。」

完全に諦めている。

「ありゃダメだな。こっちから見ても、生気が無いのがよくわかる。それだけ酒井にとっちゃ、冴子ちゃんが存在がでかかったってことだな。」

知枝が他人事のように言い放った。

「知枝さん、なんとかできませんかね？」

「なんとかするも何も、こりゃ2人の問題だろ？こっちがとやかく言えることじゃないだろ。」

お先に〜と言って、知枝は帰ってしまった。

〜数日後〜

「えーよって、これは1価の陰イオンとなって…、風岡、聞いてるか？」

今、1年C組では化学の授業が行われていた。

明日架はあの日以来、やっぱり納得出来ず、彼女なりに色々調べてみた。

しかしこれと言って収穫は無く、大学生で1人暮らしをしている息子の翔太に聞くと、冴子からは、離婚することと何かあったら父親に相談すること、奈央は父方の祖父母に預けてあるということしか伝えられていなかった。

明日架はそれを聞いてますます不信感を持った。

あれだけ家庭や子供を大事にし、守ると断言していた冴子が子供をおいて家を出ていく訳がない。

「珍しいね、明日架が授業聞いてないなんて。」

授業が終わるとすぐに、藍子が明日架の席に来た。

「うん、ちょっと考え事してて。」

「へー。いつでも相談乗るからね。」

「ありがとう。」

（I D O 日本支部）

学校が終わると、明日架はいつも通り、事務所へ向かった。その日酒井は、出張で事務所にはいなかった。

「風岡、ちょっと。」

先に来ていた隼人が明日架を呼んだ。
そして2人は事務所のビルの屋上に来た。

「お前、部長と冴子さんの事調べまわってるらしいな。」

「…はい。」

「この間知枝さんが言ってたよな。あれは2人の問題だから、俺たちが口を出せることじゃ無いって。」

「…はい。」

「わかってるなら、何で調べてるんだ？」

「…冴子さんらしくないっていうのが一番の理由です。」

「それは、お前の考えっただけだろ。」

隼人の厳しい一言。

「はい。でも、他にもあります。」

手紙に書いてあったことが本当なら、家を出て行ってしまった理由がわかりません。

仮にあの内容が嘘だったとして、部長の言うように愛想をついてしまったのなら、何故子供まで置いていったかがわかりません。

それに、今は昔より決まった時間に家に帰れるようになりました。
なのに、今さら愛想をつかすのも、説明がつかいません。」

明日架は一通り話した後、一息置いてこう続けた。

「私は部長に助けられました。そして、冴子さんにも助けられました。」

I D O の探偵が片寄った視点を持つてはいけないのはわかっていますが、どうしても信じられなくて…。あんなに他人の私にも良くしてくれた人が、夫も子供も置いて行ってしまっなんて。仕事には差し支えの無いようにしますので。」

明日架が屋上から去ろうとすると…

「ちよつと待て。」

隼人が明日架を引き留めた。

「つたく、そんな事だろうと思ったよ。」

知枝さんから聞いた。冴子さん部長と付き合う前、ある男と付き合いってた。その男は暴力団の幹部だったらしいが、冴子さんはその事を知らなかった。

で、その暴力団の事を調べてみると、最近資金不足だったのに、いきなり大金が入った。」

「ということば…」

「関わっているかもな。」

「でも、どうして岩城さんは調査したんですか？」

「俺は探偵であると同時に…、人間だ。俺もこんな事を言ったら親父に怒鳴られるだろうけど、俺もあの人か、こんな行動をしたことは本当のところ信じられない。で、お前の言う通り、不審な点が多い。」

どうする？俺たちだけでも調べるか？」

「えっ、いいんですか？」

想像していた答えとは全く違う事を言われて若干焦る明日架。

「どうせ止めたって、無駄だろ？」

「ありがとうございます、岩城さん。」

家族というもの(2) (後書き)

計画性&文章力の無い葉瑠衣。

また中途半端で終わりました(・・;))

申し訳ございません。

今回明日架ちゃんが『酒井部長にも、冴子さんにも助けられた』と
言っていました。

あれは今後重要になってきます！

家族というもの(3)

次の日、明日架はもう一度翔太の所へ行った。

「他に思い出したことねー。ないなー。」

「そうですか。何かあったら連絡ください。」

「うん、わかった。」

「心配じゃ無いんですか？お母さんのこと。」

「んー？心配っちゃー心配だけど、多分母さんは、俺がなんか言っても聞かないからさ。ただ、父さんの言うことは聞くんじゃない？だから、父さんに任せようと思って。無責任に聞こえるかも知れないけどね。」

「いいえ、そんなこと無いです。でも、不安じゃないですか？」

「父さんなら、何とかするでしょ。」

翔太は笑いながら答えた。

（IDO日本支部）

「何かわかったか？」

昼休憩で酒井が事務所にいない隙に、隼人が聞いた。

「息子さんからは何も。部長の家の周辺で聴き込みをすると、スーツ姿の数人の男たちを見たそうです。それから数日後に、大荷物を持った冴子さんに近所の方が、何処に行くのか聞くと、友達と旅行に行くと言ったそうですが、様子がおかしかったようです。」

「やっぱり、暴力団は絡んでるみたいだな。」

隼人が言い終わった瞬間、2人に声をかけた人物がいた。

「お前ら何してるんだ？」

「「高田さん！」」

「今、冴子ちゃんの名前が聞こえたが、お前らも調べてるのか？」

「すみません。」

明日架は潔く答えた。

一方隼人は、少し不思議そうな顔をしている。

「高田さん今、お前らもっておっしゃいましたか？」

「ああ。あつ……。」「

やってしまったと言うような顔をする高田。
すると後ろから、知枝が笑いながらやって来た。

「ハハハッ。相変わらずだな高田。隼人に入知恵したのは俺だ。」
おそらく冴子の過去のことだろう。

「まあいいや、なら話は早い。お前らが持つてる情報よこせ。」

高田がまるで何事もなかったかのように、隼人たちから情報を得ようとする。

「いいですけど、高田さんも教えてくださいよ？」

明日架がすかさず言った。

「チッ。わかったよ。」

「なるほどなー。」

知枝が言った。

「これだけ情報が揃えば、部長も一緒に冴子さんのこと捜しますよね？」

明日架が嬉しそうに言った。

「多分：な。」

それに比べて隼人は、少し曇った表情をしていた。

「次の日」

「部長、お話したいことが。」

この日は日曜日で、明日架も隼人も朝から事務所にいた。

そして、出勤してきたばかりの酒井に明日架が声をかけた。

「何だ？」

答えながらも、明日架と目を合わせようとはしない酒井。

「冴子さんの事です。」

酒井の動きが一瞬だけ止まる。

しかし、また動き出した。

そして、冷静にこう答えた。

「冴子がどうした？」

「居場所がわかりました。家を出ていった理由も。」

明日架は今まで調べてきたことを話した。

「部長、冴子さんに会いに行きましょう。それで、暴力団の方も片付けちゃいましょうよ。」

それに対して酒井は、こう返した。

「今お前が話したことは、列記とした証拠が無い。あくまでも、状況証拠だ。そんなんで、事務所の探偵を動かすわけにはいかない。お前もそんなこと調べてる暇があったら、他の仕事しろ。」

「ですが!」

「この支部長は俺だ!俺の決定に従えないやつは出ていけ!」

酒井は明日架に怒鳴った。

「やっぱりな。」

知枝がため息混じりに言った。

「こうなるよな。」

それに高田も続く。

「まあ、予想通りといえば予想通りですね。」

隼人までも2人に続いた。

「まさか、ここまで来ても捜さないなんて。」

「いや、捜すとは思ってぞ。」

明日架の言葉を、知枝が否定した。

「どういう意味ですか？」

「捜すとは思って、これは部長個人の問題だから、1人で行くだろうな。」

「そんな。」

そして、4人が一斉に黙ってしまった。

「明日って、先月の振り替え休日ですよね？」

最初に口を開いたのは、隼人だった。

先月は全員仕事が進み入っていて、休暇が取れなかったために振り替えられたのだ。

「じゃあ、明日捜しに行くかもしれませんね！」

明日架の言葉に高田がこう付け足した。

「部長的には、今すぐにも行きたいだろうからな。」

「次の日」

明日架たちは、冴子がいるアパートの近くにいた。

とりあえず、酒井が来るのを待つて、もし2人だけで解決できそうなら見守る。駄目なら、助けを入れようということになった。

「おっ、来たぞ部長。」

知枝が指さす先を他の3人が見た。

酒井は、冴子がいる1階の一番奥の部屋のインターホンを押した。中からは冴子が出てくる。

急に来た酒井に驚いたのか、扉を閉めようとするが、酒井はそれを止めた。

すると、スーツ姿の男たちが酒井たちを囲んだ。

「これはヤベーな。」

高田が言った。

「そうだな。高田と隼人と俺でスーツの男たちを、明日架ちゃんは冴子ちゃんを安全な場所へ。」

「「わかりました。」」

知枝の指示に、明日架と隼人は答えた。

「知枝さん、動けんのかい？」

高田が笑いながら言うつと…

「こんな時だけ、年寄り扱いするな！」

知枝が反論すると同時に、4人は酒井たちのもとへ向かった。

家族というもの(3) (後書き)

誰か葉瑠衣に文章力というものをつけてやって下さい(T-T)

またもや終わりませんでした…。

更新遅れてしまって申し訳ありません。

大会などあったもので…。

次回には終わると…思います。

家族というもの(4)

「冴子よー、金出せや。」

スーツの男の1人が、金を要求した。

「テメーらに出す金なんざ、1円もねえーよ。」

酒井が言い返すと、

「何だと!!！」

と、別の男が叫び殴りかかろうとする。

酒井はそれを止めたが、さらに別の男が殴りかかる。

それを止めたのは…隼人だった。

「人にはあんなこと言っておいて、自分だけ来るなんて、職権乱用ですよ。」

「隼人の言う通り、無理にもほどがあるぞ。」

「そうそう、部長1人が無理するなら未だしも、知枝さんにまで無理させてるんだからよ。」

「おい、お前どーゆー意味だ？」

事態は切迫しているのに、何故かどうでもよい話をする高田と知枝。それでも確実に、相手の戦力を奪っているのだからすごい。

その頃明日架と冴子は、アパートから大分離れた駅前の喫茶店、以前隼人と来た情報屋兼喫茶店にやって来た。

「ごめんね、明日架ちゃん。」

冴子が明日架に謝るが、明日架は首を横に振った。

「そんなこと言わないでください。」

「でも、迷惑かけちゃったから…。」

「私は冴子さんに救われました。冴子さんがいなかったら、私は学校に行つて友達を作ることなかっただろうし、生きてさえいなかったかもしれないですよ？それに比べたら、今回私がしたことなんて…。」

そう言つて、明日架は笑った。

すると喫茶店の扉が開いた。

「おっ、いるな？」

言いながら高田が入り、それに続いて知枝、隼人、少し間を置いてから酒井が入つて来た。

「高田さん、知枝さん、岩城君、今回は本当に「あー、それはまた今度でいいから、とりあえず今日は…な？」」

冴子が謝罪しようとしたところを、知枝が止めた。

「じゃあ部長、また明日。」

そう言つて、高田と知枝は出ていった。

隼人は2人に一礼してから、高田たちが続いて出ていく。

そして明日架は、冴子の方を向き、笑顔を浮かべてから隼人同様一礼をし、店を出た。

「…。」

酒井と冴子の上に気まずい空気が流れる。

店のマスターは、気を使つてどこかへ行っている。

「何があつたんだ？」

最初に口を開いたのは、酒井だった。

「…今日、お金を出せと脅してきた人は、私が昔お付き合ひしていた人です。でも、最近は全く連絡をとっていませんでした。」

冴子は、その男が暴力団の幹部だったことはつい最近まで知らなかったこと、1週間ほど前に金を要求してきたこと、要求に応じなければ子供に危険が及んでいたことを話した。

「勝手なことをして、本当にすみませんでした。私のせいでああなたの仕事に迷惑をかけたくなって…。でも、かえって面倒なことになつてしまった。本当にごめんなさい。」

冴子はうつむきながら言った。

「なんだよ、てっきり愛想つかされたのかと思ったよ。まあ、あれだな。皆無事でよかったな。」

酒井はそう言うと、冴子の肩に手を置いた。

〳〵次の日〳〵

「お疲れ様です。」

いつも通り、学校を終えた明日架が事務所に行くとき……

「あつ、冴子さん！」

冴子が来ていた。

「お帰りなさい、明日架ちゃん。それじゃあ、改めて……。この度は本当にご迷惑をお掛け致しました。申し訳ありませんでした。」

冴子が深々と頭を下げる。

「そんなに、気にすることはないよ、冴子ちゃん。もし冴子ちゃん

じゃなくても、IDOとしては、助けていただろうしな。」

知枝が言つと、高田もこう続けた。

「部長も、冴子ちゃんとギクシヤクしたままだと、仕事が手につかない様子だったからな。」

と言つて、酒井の方を見るが、酒井は無視する。

「岩城君と明日架ちゃんも、本当にありがとう。」

「いいえ、怪我などなくて良かったです。」

隼人の大人な一言。

「私はこの間言つたとおりです！」

そう言つて、明日架が笑顔を見せると、冴子も笑つた。

「そうだ、お礼に皆さんにお菓子を作ってきたんです。よかつたらどうぞ。」

と言つて渡された箱の中には、ケーキが入っていた。

「これ、冴子さんが作つたんですか？」

「ええ、そうよ。」

「すごい。いただきます！」

「美味しいです！」

「良かった。」

こうして、酒井家の大事件は幕を閉じた。

「冴子が帰ったあと」

「知枝さん」

「んー？」

「この間、翔太君の所に行った時、翔太君こう言ったんです。自分が何を言っても、冴子さんは多分聞き入れないだろうから、部長に任せる。部長ならなんとかするだろうって。」

「うん、それが？」

「すごいなと思って、翔太君の言う通りになったので。あそこまで冷静でいられたのって、部長のこと、信じてたからですよね？」

「そうだな。」

「家族ってこういうものなんですね。」

明日架が言うと、知枝は少し寂しそうな笑顔を浮かべながら、頷いた。

家族というもの(4) (後書き)

家族というもの、やっと終わりました！
良かった、終わって。

長々と、申し訳ありません(^ | ^ ;)

明日架ちゃんが最後に家族について、話していましたね。
あれには、深い理由があるんですよ？
それはまた先の話なんですけどね。

ではまた次回をお楽しみに！！

ご意見、ご感想お待ちしております。

美しくある（前書き）

《家族というもの》同様、今回出てくるIDOMメンバーを紹介します！

が、名前だけなら今回は全員でできます（、、）
なので、今回喋った人を紹介します！

安藤雄作^{あんどうゆうさく} 44歳。

入所して21年

酒井が以前アメリカにいたときの部下。

去年の人事で日本に来た。

沢口孝文^{たかぐちこうぶん} 32歳。入所して9年

平井と吉川によくいじられている。

以前はオーストラリアにいて、1年前に吉川と一緒に日本に来た。L

石川卓也^{いしかわたくや} 25歳。

入所して2年

2ヶ月前まで、小早川と同じカナダで仕事していた。

実力はあるが、やたら猫探しがうまい

美しくある

「IDO日本支部」

ある日の夕方。

「ちょっと、皆集まれ」。

全員が集められた、ということは、また面倒事かと思った明日架。だがその考えは、すぐにうち砕かれた。

「えー、今日は、花火大会だ。親交を深めるためにも、皆で見に行くとぞ！」

「なんだよ、この時間帯になって、まさかの仕事の話かと思ったよ。」

知枝の言葉に、皆が笑う。

「さすがに俺も、そこまで鬼じゃない。さてと、そろそろ場所とりしねえーと。皆行くぞ！」

IDO日本支部一行は花火大会の会場である、河原に来ていた。

酒井の言う、一番いい場所に大きなブルーシートを敷いた。

「さてと、夕飯とつまみと飲み物を買わないとだな。誰か行くやついないか？」

すると知枝が

「俺の知り合いが、イカ焼きやってるから、買って来る。隼人、石川行くぞ。」

と言って2人をつれ、買いに行った。

「じゃあ俺は、ビールを。隼人と明日架ちゃんは、ジュースだよな？小早川、田上、二階堂、池、小野田、一緒に来い。」

今度は高田が、5人を連れて行った。

「じゃあ、安藤と松山、芹澤、沢口、吉川、平井は適当になんか買ってきてくれ。俺と風岡は、ここで場所とりだ。」

「部長だけ、楽ですね。」

安藤が若干呆れながら言った。

「風岡だって残るじゃねーかよ。」

「明日架ちゃんは、女の子だし…」

酒井の反論に、沢口がさらに反論すると…

「いいから行ってこい！」

酒井、面倒くさくなりました。

ほとんどの人が取ってあった場所に帰ってきた。

「あれ、部長、風岡は？」

隼人は、待っていたはずの明日架がないのに気付いた。

「あー、その辺歩いてくるって言ってたぞ。」

「じゃあ、探してきます。先に、始めててください。」

夕日が土手を照らすなか、隼人は明日架を探す。

少し歩いたところで、座っている明日架を見つけた。

隼人が声をかけようとしたとき、一匹の野良猫が明日架に近づき、隣にちょこんと座った。

明日架はその猫を見て

「君は人間が嫌いじゃないの？」

と声をかけた。

猫は一度だけ明日架の顔を見ると、また前を向いた。明日架はその仕草を見て微笑むと、猫と同じように前を向いた。

どうやら猫は、明日架を気に入ってしまったようだ。

「風岡」

少しその光景を眺めた隼人は、明日架を呼んだ。

「あつ、岩城さん。」

明日架は立ち上がった。

すると猫も立ち上がり、隼人の方に来て、顔を見上げる。それを見た隼人は、しゃがんで

「ごめんな、でももう行かなきゃならないんだ。」

と猫に言った。

猫は、その言葉を理解したかどうかは定かではないが、何処かへ行ってしまった。

「もう皆戻ってきてる。先に始めてもらってるから、戻るぞ。」

隼人はそう言って歩き出した。

「そうだったんですか。すみません。」

隼人に続いて明日架も歩き出す。

「岩城さん、1つ質問してもいいですか？」

「なんだ？」

「岩城さんって、眼鏡かけてる時と、かけてない時がありますよね？あれって、何ですか？」

明日架が最初に隼人に会ったとき、隼人は眼鏡をかけていたが、始めて事務所に来たときには眼鏡をかけていなかった。その後も眼鏡をかけたり、かけなかったり…。

「学校では眼鏡かけて、仕事の時はかけない。ちょっとした変装ってとこだな。」

「そうなんですか。確かにかけてる時とそうじゃない時って雰囲気違います。」

「だから始めて事務所に行った時、驚いた顔したんだな」
隼人には気付かれていた。

「風岡、岩城、早く来ねえーと食いもなくなるぞー！」
すでに若干酔っている酒井が、戻ってきた2人に言った。

「すみません。いただきます。」

明日架が買ってきてあった焼そばを食べた時…

ヒュ〜〜〜…

バン！

花火が上がった。

「おー、始まったな！たーまやー！！」

「部長、タイミング早いです。しかも今時それは言いませんよ。」

「うっせー！」

酒井の発言にツッコミを入れた石川だったが、逆に怒られてしまう。

花火は様々な色、大きさ、形の花を咲かせてゆく。

「日本人に生まれて良かったな。」

高田が染々と言う。

すると明日架が

「花火つて、私と似てる……」

と呟いた。

その声は、隣に座っていた隼人にしか聞こえていなかったようだった。

「えっ？」

隼人が聞き返す。

「花火は、一瞬だけ皆の前に出てきて、すぐどこかへ消えてしまう。私も、一瞬だけ表の世界に出たと思ったら、また裏の世界に引き戻されたので…」

「…」

隼人には、返す言葉がなかった。

「あつ、でも…やっぱり花火とは違うな。」

「何でだ？」

隼人はようやく言葉をかけることができた。

「花火は、一瞬だけは美しくいられる。私は…一瞬でも美しくあったことなんて無いですから。」

明日架は言い終わると、ハツとした顔をして

「すみません、今は忘れてください。」

と言って、また花火の方へ顔を向けた。

「じゃあまた明日！」

花火が終わると、それぞれ帰って行った。隼人はその足で、ある場所に向かった。

それぞれの孤独

〈喫茶店〉

午後9時。

ある男が、片付けに取り掛かった喫茶店に来た。

ガチャ

「お客さん悪いね。もう店しめ…なんだ隼人が。」

隼人はカウンターに座った。

「コーヒー」

「はいよ。」

で、こんな時間に何しに来たんだ？」

マスターは、隼人にコーヒーを出しながら聞いた。
隼人はコーヒーを一口飲んでから口を開いた。

「例の情報は何？」

その問いに、マスターは首を横に振る。

2人の間に沈黙が流れた。

「今日は花火大会だったんだよな。」

その沈黙に耐えられなくなったマスターが話をふった。

「ああ、さつき事務所の人達と行ってきた。」

「ふーん。そうか。」

そう言えばお前さ、あのお嬢ちゃんと仲良くやってんのか？」

「風岡のことか？まあ一応。」

マスターは、隼人を珍しいものを見るような目で見ながら、へえ」と言った。

「何でだ？」

「俺を甘く見るなよ？俺が何年情報屋やってると思ってるんだ？これでも、そこらの刑事よりは人間観察はできるんだよ。」

マスターは自分用に淹れたコーヒーを一口飲んでからこう続けた。

「あのお嬢ちゃんがここへ始めて来たとき、相当警戒してた。ありや昔何かあったんだろな。人間って言うより、男が嫌いなんだなきっと。だからお前と仲良く出来てるってのが、不思議だったんだよ。」

マスターのその言葉で、隼人は今日の明日架の言葉を思い出した。

『 花火つて、私と似てる

花火は、一瞬だけ皆の前に出てきて、すぐどこかへ消えてしまふ。私も、一瞬だけ表の世界に出たと思ったら、また裏の世界に引き戻されたので

でも…やっぱり花火とは違うな。

花火は、一瞬だけは美しくいられる。私は…一瞬でも美しくあつたことなんて無いですから。』

「鋭いな。

昔、何があつたのかは俺も知らない。でも、確実に何かあつたみたいだな。それも、かなり壮絶だったと思う。今言えるのはそれだけだ。」

すると隼人はあることを思い出した。

「そう言えば今日、上司に言われた。『明日架ちゃんにとってお前は、ちよつと特別な存在なんじゃないか?』って。」

それはいか焼きを買いに行った時に、知枝に言われた言葉だった。

「明日架ちゃんってあのお嬢ちゃんだよな?」

「ああ。」

「じゃあお嬢ちゃんは、お前のこと好きなのか?」

「いや、違うだろ。歳も近いし、打ち解けるのが早かったってだけの話だよ。」

それに…俺も色々あったろ。あいつが本能的にそれを感じ取って、警戒心が消えたんじゃないのか？」

「つまんねーの。」

何がだよと言いながら、隼人がコーヒーを口にする。それにつられてマスターも飲む。

「お前はどう思ってるんだ？」

「どっつって何が？」

「あのお嬢ちゃんのこと、好きなのか？」

マスターの問いに、隼人は大きなため息を1つついてからこう言った。

「そんなわけないだろ。」

「でも、お前がここに女を連れてくるなんて、始めてだったじゃないか。」

「あれは仕事であいつと組んだからだよ。」

「それだけか？」

「それ以外に何かあるんだよ。」

.....。

隼人はコーヒーを飲み干して、席を立った。

「何か情報が入ったら連絡くれ」

「わかったよ。」

「隼人！」

隼人が店を出ようとした時、マスターが呼び止めた。

「お前、一人で抱え込み過ぎてないか？お袋さんのこと……。」

「……だつたらなんだよ。」

「誰かに相談するとか……何かあるだろ。」

「誰かって、誰に？」

「いやそれは……お前の親父…………。」

マスターは、ハツとした顔をした。

「柄にもねえーこと言つなよ。」

隼人は少しマスターのその表情を見て、少し笑いながらそう言って

出ていった。

「チツ」

マスターは、隼人がこの店でコーヒーを飲んで時間を潰していたことと彼の言う人間観察力で、隼人が何かを抱え込んでいることがわかった。

そして、その“何か”がなんなのかもわかっていった。

さらに、隼人がその事を誰にも相談できない理由があることもわかっていった。

わかってはいるのに、あんなことしか言えない自分に腹が立って、舌打ちをしたのだ。

「2人ともあの年で1人ぼっちか……。世の中どうなっちまってるんだろうな。」

マスターはコーヒーを飲み干し、店の片付けを再開した。

それぞれの孤独（後書き）

今回はちょっと暗い話になってしまいました。

隼人君にも、実は何かあったみたいですね…

そのお話はまた出てきますので、それまでのお楽しみです（＾Ｏ＾）

初恋（前書き）

ついに、ついに明日架ちゃんの恋バナです（*^^*）
とは言え、そんなに進展するわけでもなく…。

とりあえずお楽しみください！

初恋

（学校）

「あすかー！ー！」

朝から明日架の名前を叫ぶ藍子。

「どうしたの？」

「な、なんかね…ハアハア待って…い、息が…。」

おそらく、階段を駆け上がって来たのだろう。相当息が上がっている。

「フー。でービッグニュースだよ！岩城先輩がコクられたんだって
！！」

「「え！！？」」

明日架ではない、他の女子が皆反応する。
そして…

「ちょっと、藍子詳しく教えて！」

「藍子ちゃん、告白した人ってだれ！？」

「で、岩城先輩はなんて？」

一気に沢山の女子から沢山の質問をされる藍子。
明日架と言えば、一步引いた所から見ているだけだった。

「はあくい皆落ち着いて！」

告白したのは、岩城先輩と同じクラスの田嶋玲子先輩。」

「あ！あのお金持ちの？」

田嶋玲子。父親が田嶋貿易の社長。母親は代議士の娘。学校の中でも有名なお金持ちのお嬢様。

「そう、その人。」

「で、岩城先輩の返事は？」

「それがね…わからないの。」

藍子はこの情報を和也から聞いた。和也が隼人に、告白の返事は何と言ったのかと聞くと、何のことだ？とはぐらかされてしまったのだ。

「なにそれ。」

「でもね、有力な情報があるの！」

嬉しそうに話し出す藍子。

「実はね、告白したあと、田嶋先輩が岩城先輩と一緒にいることが増えたんだって！お弁当食べてる時とかも、何処に行くのもずーっと一緒！！しかも田嶋先輩は岩城先輩のこと『隼人君』って呼んで

るんだって。女子でそんな風に呼んでる人いる！？だから、告白は成功したんじゃないかって言うのが今一番有力なの！」

藍子の話を聞いていた女子が一斉にざわつき始めた。その隙に、藍子が明日架に話しかけた。

「明日架はどう思う？」

「どつってなにが？」

「岩城先輩が田嶋先輩と付き合ってるかもって話！」

「ああ。んー。」

「どうも思わないの？」

「どうも思わないっていうか、何ていうか……。」

「えー、うち、てっきり明日架は岩城先輩のこと好きなんだとばかり思ってた。」

「いや、別にそういうわけじゃ……。」

「はあ」

事務所に着くなりため息をつく明日架。

「どうした、明日架ちゃん。ため息なんかついて。」

書類をまとめながら知枝が言った。

「知枝さん、人を好きになるって、どういうことを言うんですか？」

「えっ…いや、何と云えばいいか。例えば、ボーっとしてる時気付くとそいつのことを考えていたり、そいつと喋っていると楽しかったり、嬉しかったりするんじゃないか？まあ人それぞれだろ。」

「そうですね。」

「何で急にそんなことを聞いてきたんだ？好きなやつでもできたか？」

「それがよくわからないんです…。」

知枝が少し考えてるような素振りを見せると、こっぴ切り出した。

「そいつはどんなやつだ？」

「とてもいい方ですよ。」

「今まではどう思ってたんだ？」

「…特にはなんとも。でも友人に、てっきりその人の事が好きなん

だと思つてたと言われて、それでちょっと考えてみたら…わけがわからなくなつてきてしまつて…。」

知枝がまた考えを巡らす。そして…

「そいつとは今はどんな関係だ？」

「あー…それはちょっと…。」

「そつか…。まあ少し様子見だな。」

「そうですね…。ありがとございました。」

明日架が事務所から出たあと…

「また知枝相談所開いてましたね。」

高田が知枝に話しかけた。

日本支部では、知枝が相談に乗っていることを“知枝相談所”と呼んでいる。

「明日架ちゃんにもついに好きなやつができたみたいだな。」

知枝がニヤツと笑つた。

「しかも、あいつですよね。」

高田もニヤツと笑った。

初恋（2）

（次の日）

「明日架は本当に岩城先輩のこと好きじゃないの？」

朝から何度も同じ質問をする藍子。

「だから、よくわかんないんだって。」

朝から何度も同じ答えを言う明日架。

「それに、私さ、今まで人を好きになつたことないの。だから本当にわからないの。」

明日架のその言葉に驚きを隠せないでいる藍子。

その時、教室の扉がノックされ、誰かが失礼しますと言って入ってきた。

隼人だ。

「田中先生はいらっしゃいますか？」

田中先生とは、明日架たちのクラスの担任である。

「居ません。」

誰かが答えた。

「そうですか。失礼しました。」

隼人はそう言って出ていこうとした。
その時、1人の女子が隼人に話しかけた。

「あの！失礼ですが、岩城先輩は田嶋先輩とお付き合いなさっているんですか？」

「だから…何のことですか？」

明日架は不信に思った。

おそらくその女子生徒が隼人に玲子のことを聞いたのはこれが始めてのはず。

にもかかわらず、隼人は“だから”と言った。

そして、明日架はある可能性に気付いた。

「岩城先輩、田嶋先輩に告白されましたか？」

「それ、和也とか倉木にも聞かれたけど、一体何の話なんだ？」

「やっぱり。」

明日架が気付いた可能性は、事実が変わった。

「待って、どーゆーこと？」

未だ状況の掴めていない藍子が明日架に聞いた。

明日架は藍子の方に振り返り、少し呆れたような顔をしながらこう答えた。

「デマだよ。」

隼人は1つため息をついたあと、ある場所へ向かった。

「でも、誰が何のために…。」

「こんなデマを流して特する人なんて、1人しかいないでしょ？」

そう言うと、明日架も隼人の後に続いた。

隼人が教室に戻ると玲子が寄ってきた。

「隼人くん、どこに行ってたのお？探したんだよ？」

甘ったるい声で話しかける玲子に冷たい視線を送る隼人。
その様子を和也や倉木、藍子、明日架は教室の中から、C組の生徒
たちは教室の外から見守っていた。

「ど、どうしたの？隼人くん。こわ〜い顔してるよ？」

若干ひきつった笑顔を見せる玲子。

隼人は玲子から視線を離してこっぴどく切り出した。

「ろくでもないデマ流したのはお前か？」

「な、なんのこと？」

「しらばっくれるのか。じゃあこの際だから言わせてもらう。俺に付きまとうな。迷惑だ。」

隼人はさっきより少しだけ声を大きくして言った。回りにいる人たちにも聞こえるようにそうしたのである。

隼人のその言葉を聞いて、玲子は目を見開いた。しかし、その後すぐに不敵な笑みを浮かべるところ言い出した。

「あーあ。このまま行けば、うまくいくと思ったのになー。つまりないの。」

私は今まで望めば何でも手に入ったのに、貴方は手に入れられない。どうして？

貴方は私の何が嫌なの？」

すると隼人は玲子の方を見ることもなく、こう答えた。

「全てだ。」

「じゃあ隼人はコクられてないんだな？」

事情を聞いた和也の一言だ。

「ああ。知らないうちについてくるようになってただけだ。」

「何だそうだったんですか。」

残念そうに呟く藍子。

「大体俺が誰かと付き合うとでも思うか？」

「思わない！！」

隼人の問いに和也は即答する。

「何でそんなに断言出来るの？」

藍子が和也に問うと、隣にいた明日架も頷いた。

「あー。少し前に言ってたんだよ。女は面倒だって。」

苦笑いをする和也。

「よかったね明日架。」

隼人や和也には聞こえないような小さな声で藍子が言った。

「えっ…？」

「ほっとしなかった？」

明日架は少し考えた後にゆっくりと答えた

「した…かも。」

「それが恋だよ！」

「…でも、ね？」

ん？と藍子が言った。

でも明日架は黙ったままである。

「どうしたの？言ってみな。うちは何を聞いても明日架の親友だよ？」

藍子はそう言ってニコツと笑った。

「ありがとう。」

あのね、多分私の事を好きになってくれる人なんていないと思うの。

「なんでよ。明日架は可愛いし、実を言うと結構男子からも人気あるんだよ？」

「私はね、藍子が思ってるほど綺麗な人間じゃないんだよ。」

「えっ、どういう意味？」

明日架は少し間をおいてから、こう答えた。

「そのうち教えてあげる。」

隼人はそのやりとりを、明日架には気付かれないように少し遠くか

ら見守っていた。

初恋(2) (後書き)

ご意見、ご感想お待ちしております！

命がけの仕事（前書き）

今回のお話は少し長くなりそうです（――）

命がけの仕事

（I D O 日本支部）

玲子の告白騒動以来、明日架の頭の中ではある疑問が浮かび上がった。

自分は本当に隼人の事が好きなのか…

藍子に言われた通り、少しホツとしたような気持ちになったのは事実である。

でもそれが、イコール隼人の事が好きということにはどうしても繋げられずにいた。

玲子に関する噂にはあまりいいものは無い。だからそんな人と隼人が付き合うのがただ心配だった、だから違つとわかりホツとしたのではないか…。

これが明日架の考えである。

しかし、明日架自身。とにかく恋愛経験が無い。だから何もかもが始めてで、何もかもがわからない。だから困っているのだ。

「この事件、どうにかならないかな」。

新聞を読んでいた高田がボソツと言った。

「何がですか？」

明日架は今まで考え事をしてきた頭を切り替えて、高田の言葉に応じた。

「これ、連続爆破事件。毎回爆破予告と難解な暗号文を送りつけてきて、その答えがわからないと暗証番号がわからずタイマーが解除できない。解除できないと、ドカン。」

最近首都圏で連続している事件だ。

1回目と2回目は暗証番号が解読できず、3回目は毎回予告に書いている“約束ごと”を警察が守らなかつたためこの3回でかなりの被害がでた。とくにたくさん警察官が重軽傷を負い、死者も出ている。そして犯人は未だ見つかっていない。

「こういふ事件は早く解決してほしいですね。」

「あー、そう思うだろう？そこで仕事だ。」

さっきまで自分の席に座っていた酒井が、資料らしき物を持って明日架たちのところへ来た。

「警察から依頼だ。」

「来た来た。」

高田が読んでいた新聞を机の上に置いた。酒井は事務所にいる人全員にこう告げた。

「また爆破予告だ。」

今回は依頼はちょっとやっかいだぞ。」

「これが今回の依頼か。」

事務所での話を、明日架は喫茶店で合流した隼人に話している。

「爆破予告には、今週の日曜日に埼玉県のテーマパークに爆弾を仕掛けると書いてありました。警察としては、当日までには犯人の身柄を確保する方向で話を進めています。IDOとしてはそれは無理ではないかとの考えが強いですね。」

爆破予告日まではあと3日。

警察が約1ヶ月かけて逮捕出来なかった相手を3日で捕まえるのは無理だ。

「犯人は今まで予告文に書いたことは忠実に守っています。毎回予告文の中に“もし爆弾を止めることが出来たら、僕は自首する。”という一文があります。行動分析家の意見も参考にして、IDOは当日爆弾を止めるのが一番の解決策だと考えています。」

当日爆弾を止めるということは、暗号文を解読し爆弾を解除することになる。とても危険なことだ。だから酒井は“やっかいだ”と言ったのだ。

隼人は明日架の話を聞きながら資料に目を通す。

そして一頻り読み終わったあと、明日架に質問をした。

「この犯人、どうして連続爆破事件を起こしてると思う？」

明日架は少し考えたあと、こう答えた。

「犯人は警察に恨みを持ってるんじゃないでしょうか。」

「どうしてそう思った？」

「犯人は3回とも警察に被害が及ぶような場所に爆弾を設置しますし、警察に向けてのルールも作っていました。爆弾なんて大掛かりな物を使うところをふまえると、警察に恨みがあると考えるのが妥当かと。」

「そうだな。だから部長もやっかいだと言ったんだろ。」

「命がけですね……。」

「ああ。」

この時明日架は、喫茶店の中の空気が少し重く感じた。

命がけの仕事(2)

酒井から依頼内容を知らされた翌日、警視庁のとある会議室でIDOと警察との“合同会議”が行われた。

その会議には酒井と知枝と隼人が参加する予定だったが、「何事も経験だ！」という酒井の一言から明日架も参加することになった。

「えー、それでは只今より合同会議を始めます。礼！」

進行役を務める警察官が号令をかけた。

「ではまず最初に、警察から…葛西警部。」

葛西は、はいと言って立ち上がった。

「えー、我々警察としましては、遅くても予告日までには犯人を逮捕したいと、そう考えております。ですから、IDOの方々にもそのような方向でお手伝い頂けたらと思っております。」

葛西は満足そうに言うつと自分の席に着いた。

「はい。では次にIDOの酒井部長。」

酒井も同じように、はいと言って立ち上がった。

「我々IDOとしては、今葛西警部がおっしゃったことは正直無理だと考えております。」

酒井のその言葉で警察側がざわめく。

「ゴホン！えー、前々から申ししていた通り、2日間で犯人を逮捕するのは無理だと断言出来ます。ですから、当日の対策とチームパーク職員への対応指導、そして暗号文の解読に残り少ない時間を費やすのが最適と思われます。もちろん、犯人を探すのは継続すべきだと思っておりますが、あくまでも優先順位はそちらではないことを、ご理解ください。」

酒井が言い終わった瞬間、警察側から野次が飛んできた。

「警察を甘く見るな！」

「俺たちを馬鹿にするな！」

「こつちにはこつちのやり方があるんだ！」

「事件解決後に世論からの信頼が失われたらどうしてくれるんだ！」

「「そっだ、そっだ！！」」

バンツ！！！！！！！！

突然、隼人が机を叩いて立ち上がった。

「こんな会議だったらやるだけ無駄だ。部長お先に失礼します。」

隼人はそう言う与会議室から出て行ってしまった。

会議室に沈黙が流れる。

すると明日架がゆっくりと立ち上がりこう言った。

「私たちは、どうやってこの短時間で市民の安全を確保するか、それを話し合うために集まったのであって、警察とI D Oが言い争いをするためではありません。岩城さんの言う通りです。こんな会議に参加するくらいだったら、暗号文を解いた方がよっぽどいいですよ。失礼します。」

言い終わると明日架は、隼人と同様に会議室を出ていった。

そしてまた沈黙。

「大の大人が未成年2人に叱られたな。さーどうする?」

沈黙を破った知枝の後に続いて酒井が話し出した。

「そんなに嫌だったら、I D Oは手を引きましょうか?」

酒井がニヤリと笑った。

「岩城さん!!」

警視庁を出て事務所に戻ろうと駅に向かっていた隼人を明日架が呼び止めた。

「お前、何やってるんだ？」

「抜け出して来ました。」

「えっ？」

「それより、暗号文解きましょ！」

明日架はそう言うと、今回送られてきた暗号文のコピーをバッグの中から取り出した。

今回の暗号文は文ではなく、絵だった。

夜空に浮かぶ月が真つ二つに割れていて、その間に漢字の“十”が書かれていた。

そして、暗号以外のもう一枚の紙にはこう書かれていた。

《来週の日曜日午後5時、埼玉県にあるテーマパークで大きな花火を打ち上げます。

ルールはいつもと同じ。もし爆弾を止めることが出来たなら、僕は自首する。一般人に爆弾の存在を気付かれないといけない。爆弾を解体してはいけない。

もしルールを守らなかつたら僕が遠隔操作で爆発させちゃうから気をつけて。

今回の暗証番号は17桁です。

では皆さんの健闘を祈ります。》

「いつもと内容はさほど変わりませんね。」

「でも、“警察の皆さん”から“皆さん”に変わったな。」

「IDOが関わり始めたことを、犯人は知っているんでしょうか。」

「さーな。とにかく、命がけの仕事にはなるだろうな。」

2人の間に緊張が走った。

命がけの仕事(2) (後書き)

どうして『埼玉県のテーマパーク』かわかりますか？

本当は千葉にしようかと思ったんですけど、そうなるとパクリなので埼玉県にしました(。口。；

ごめんなさい、無駄話でした(T-T)

命がけの仕事(3)

「IDO日本支部」

爆破予告日前日。

結局合同会議ではIDOの意見が採用された。

しかし、それに納得のいかない警察の捜査員たちは犯人を追っているようだが、未だに有力な手掛かりが一つも掴めていないようだった。

そして、暗号の方も解けていなかった。

この事件の犯人は暗証番号に数字だけでなく、記号やアルファベットも含んでいた。それに加えて17桁ともなると中々解読出来ずにいた。

そんな中、知枝が唸っている。

「知枝さん、唸ってても暗証番号はわかりませんよ。」

「コーヒーを入れてきた明日架が知枝に言った。

「お、ありがとう。いや、何か引掛かるな、って思ってたよ。」

「何にですか？」

「前にも似たような事件があった気がするんだよね。」

そしてまた唸る。

ふと何かを思い付くと、知枝は立ち上がった。

「ちょっと資料室行ってくる。気になるし、犯人逮捕に役立つかも

しれないからな。」

そう言つて資料室へ向かった。
すると石川が顔を上げてこう言つた

「あれ？犯人つて、爆弾止めて自首させるんじゃない…バシンッ！」

酒井が今回の連続爆破事件のファイルで石川の頭を思いっきり叩いた。

「馬鹿言つてんじゃないよ！事前に止められるんだつたらそれにこしたこたあねえだろ！」

石川が痛がつているのを放つておいて、酒井がメンバー全員に話し始める。

「じゃあまあ知枝さんは置いておいて、こいつは放つておいて、明日のことについて少しいいか？」

その言葉にメンバー全員が酒井の方を向いた。

「今回の事件はこの間から言っている通り危険だ。今までに何人もの死者を出している。それもターゲットが警察なら俺たちにも危険が及ぶ事が十分に考えられる。その辺りのことはしっかりと頭に入れておいてくれ。」

「はい」

「最後に、1つだけ命令を出しておく…絶対に死ぬなよ！！」

「「はい！」」

「怖いですね…」

明日架が隣にいた隼人に言った。

「ああ。」

思ったよりもあっさりした答えが返ってきたことに驚いた明日架は、隼人にこう聞いた。

「怖くないんですか？」

すると隼人はゆっくりと答えた。

「怖いよ。」

でも、俺たちがやらなきゃまた犠牲者が出る。それだけは絶対に避けたい。」

隼人のその言葉に明日架は静かに頷いた。

「テーマパーク内」

爆破予告日当日。

結局暗号を解くことは出来ずにいた。

I D O 日本支部のメンバーと警察官たちは、捜査員であることが犯人にバレないようにありとあらゆるものに扮していた。

客だったりテーマパークのキャストだったり、清掃員だったり…

葛西と酒井、高田、その他数人の捜査員はバックヤードにある一室を借りて作った本部にいた。

明日架と隼人はというと、カップルを装い、客に混じっていた。と言っても単に2人で歩いているだけで手を繋いだりなどと言うことは一切していない。

『おい、そのこの2人、もうちょっとカップルらしくしろ。』

無線から酒井の、今の状況には不釣り合いな言葉が聞こえてきた。

「部長、今はそんなジョーク言ってる場合じゃないですよ。」

隼人の冷静な一言に酒井は咳払いをした。

「わかってるよ！」

I D O 捜査員並びに全警察官に告ぐ。注意事項にもあったように、絶対に気を抜くな。爆発物を見つけても慌てず落ち着いて行動するように。どんな些細なことでも気付いたり、わかったことがあれば本部に連絡を入れる。いいな！」

「了解」

「了解」

「了解」

「了解」
「了解」

「えー本部より知枝、本部より知枝。新たな事実が判明したので連絡する」

現場の捜査員全員の無線に知枝の声が届く。

「今回の事件は15年前にあった連続爆破事件とそっくりなんだ。」

15年前にあった連続爆破事件は、警察を恨んでいた犯人が、警察の信頼を失わせることと警察への復讐を動機とした事件だ。

爆破は合計4回あって、1回目、2回目は公園、3回目はショッピングセンター、4回目は遊園地に爆弾が設置された。

今回の連続事件も15年前の事件と同じだった。

「でも、なんで今になって15年前の事件の模倣犯が？」

無線から誰かの質問が聞こえてきた。

事件が起きている最中、または事件直後ならわかるが、15年たった今、なぜ模倣犯が現れたのか。これが今一番の疑問だ。

「実はな…」

知枝がその疑問に答えるため、ゆっくりと話し始めた。

命がけの仕事(3)(後書き)

また中途半端でごめんなさい…。

命がけの仕事(4) (前書き)

今回はいつもより少し長くなりました。
でもまだ終わりません(- | - ;)

ようやく“命がけの仕事”って感じになってきました！
それではごっご。

命がけの仕事（4）

（15年前）

『今日午後、都内のショッピングセンターで爆発がありました。警察では連続爆破事件と見て、1ヶ月前から起きている爆発との関連を調べると共に犯人の行方を追っています。』

とある一家のリビングのテレビでは夕方のニュース番組が流れていた。

キャスターが連続爆破事件のニュースを真剣な表情で読んでいる。それをソファアームに座りながら見ていた少年が、一言

「この犯人、まだ捕まってないんだ…」

するとその隣に座っていた、彼の妹がこう言った。

「お巡りさんは、お仕事してないの？」

「お仕事はしてると思うけど…。いいの、子供は。」

「お兄ちゃんだって子供だよ！」

「はいはい。」

「はいは一回でしょ！」

「母さんの真似するなよ。」

2人の攻防を少しの間見守っていた母親は、微笑むと2人に声をかけた。

「ご飯出来たわよ。」

「「はあい」」

「えー、お魚？」

妹が嫌そうに言った。

「好き嫌いするなら、日曜日の遊園地無しにするわよ！」

「やだ！」

「じゃあ食べなさい。」

「はあい。」

「ただいま。」

「おかえり、パパ！日曜日、遊園地だよね！？」

「そうだな。楽しみか？」

「うん！」

この幸せそうな家族が、3日後の日曜日に壊されてしまった。

くテーマパークく

「実はな、15年前の最後の連続爆破事件が起こった遊園地で、両親と妹を無くした少年がいた。彼は今25歳。大学で化学を学んでいた。」

「化学を学んでいたなら、爆弾は容易に作れるでしょうね。」

知枝からの情報を聞いて、隼人が言った。

「ああ、しかも中学に入った辺りから警察を訴えようとしていたらしい。」

知枝は、まあ結局教えてもらえなかったらしいがな。と付け足した。すると、ああ、そつだ。と言って高田が話し始めた。

「確かあったな、そんな事件。あの時その男の子は毎日警察に事件についての詳しい説明をと訴え続けてきた。けどある日、パタッと止んだらしい。」

「その時期に彼は大学受験の勉強をしていたらしい。」

「本当は警察に謝罪させるか、警察を訴えようと思ってたみたいだが、何年か経つうちに警察への信用がなくなり、復讐へと変わったってことか。」

高田のその言葉にはため息が混じっていた。

「で、その男の名前は？」

「三浦正一だ。」

知枝の報告から数時間が経った。が、今のところ何の進展もない。爆発まであと5時間。

「犯人の一番の狙いが警察なら、一般人を巻き込む必要はそろそろ無くなる。」

昼食をとるために入ったテーマパーク内の飲食店で隼人と明日架

「ということは、17時頃に一般人が減るところに爆弾があるんですかね…。」

「あるいは元から一般人が少ないところか…」

2人は顔を見合せた。

そして近くにいた従業員を捕まえてあることを聞いた。

「今日休みのアトラクションってありますか？」

恐怖の館。

テーマパーク内にあるお化け屋敷である。

ここは、2日間メンテナンスで休みになっていた。

今日はその2日目だ。

その日は午前中でメンテナンスは終わっていたので中に人は誰もいない。

さらに午後5時から始まるパレードを見るため、客はほとんど近くにはいなかった。

IDOの捜査員であることを従業員に話し、許可を貰って中を捜査する。

中を探し回ること数十分。
隼人が明日架を呼んだ

「風岡！」

「はい。」

「見つけた。」

「本当ですか？」

中で隼人が爆弾を発見した。
隼人の言葉を聞いた明日架は、声のする方へ近づいていく。
すると…

「風岡、お前は本部に行け。」

「え、どうしてですか？」

「本部にここの場所を伝えて来てくれ。」

「そんなの無線で言えば…」

「いや、無線は犯人に傍受されている可能性がある。犯人にはなるべく爆弾を見つけた事を悟られない方がいいだろう。」

「でも…」

「それに、爆弾の電源が落ちてる。もしかしたら故障してるのかもしれない。だったら2人もいる必要ないだろ。」

「はい。」

「とにかくお前は本部へ行け。いいな。」

隼人は半ば強引に明日架を本部へ行かせた。

明日架が出ていったのを確認すると、隼人はある場所へ電話をかけた。

『もしもし、どうした岩城、電話なんかしてきて。無線で連絡すればいいだろ。』

電話の相手は酒井だった。

「すみません、風岡に聞かれなくなかったの。」

『えっ？』

「まず、爆弾を発見しました。場所は恐怖の館です。で、諸々の事情により、風岡をそちらに行かせました。なので風岡がそちらに着いたら連絡をください。そうしたら詳細を無線でお話します。」

『おい岩城、お前…』

「あと、俺が何を言っても風岡をこっちは絶対に戻さないでください。お願いします。」

そうやって隼人は電話を切った。

「どうした？部長。」

知枝が酒井に聞いた。

「嫌な予感がする。」

その15分後、明日架が本部に着いた。

「お疲れ様です。部長、報告が。」

「それは取りあえず後回しだ。岩城、風岡がこっちに来たぞ。」

酒井は隼人に言われた通りに行動した。

明日架はその光景をただ不思議そうに眺めていた。

『ありがとうございます。』

全捜査員に連絡します。重要なことなのでよく聞いてください。

まず1つ目。爆弾を発見しました。場所は恐怖の館です。

2つ目。爆弾のタイマーの電源は30分前に動くようになっていきます。

3つ目。爆弾と繋がっているパソコンにこんなことが書いてありました。

【ここまでたどり着けたことにご褒美をあげよう。

その前にルールだ。

まず、必ずこれを最初に見た人はその場に残ること。それ以外に誰が残ろうがそれは君たちの勝手だ。パソコンにカメラが付いている。そこから残らなければならぬ人が消えた場合、爆弾は時間に構わ

ず爆発させる。

さてここからが本題だ。

もし仮に、暗号が解けずに時間内にタイマーが解除出来なかった場合、ご褒美として、ここにある爆弾のみを爆発させる。

もちろん、何かルールを破れば問答無用ですべての爆弾を爆発させる。

タイマーが起動するのは爆発30分前。

君たちの健闘を祈っている。】

だそうです。

要は、誰も犠牲者が出ないか、多数の犠牲者を出すか、俺が死ぬか……ですね。』

その言葉を聞いた瞬間、急に明日架が動きだし、どこかへ向かおうとした。

しかしそれを、酒井が止める。

「部長、行かせてください。」

「駄目だ。お前はここに残れ。」

「でも！」

『風岡、お前はそこにいろ。』

無線から隼人が明日架を止めた。

『じゃなきゃ、嘘までついてお前をそっちに行かせた意味がないだろ。』

とにかく、暗号の解読お願いします。』

隼人はそう言うと、無線を切った。

「どうして止めたんですか、部長。何で岩城さんを1人にするようなことさせるんですか!？」

「俺だってあいつ1人にはしたくない！」

「なら！」

「だがな！今お前を向こうに戻したら、あいつの覚悟が無駄になる。それは俺にはできない。」

明日架の目につつすらと涙が浮かんだ。

「とにかく、暗号解くぞ。」

酒井は今、そのように言うしかなかった。

爆発まであと

4時間。

命がけの仕事(4) (後書き)

ご意見、ご感想お待ちしております。

もしよかったら、評価の方もして頂けるとありがたいです。

命がけの仕事（5）

カチカチカチ…カチカチ…

隼人は無線で連絡を入れたあと、ある人物にメールを打っていた。しかしそれは1人ではなく…

「よし。」

1つ目完了。

携帯の画面に“送信しました”の文字が表示された。そしてもう1つも作成し始める。先程とあまり変わらないくらい、短い文章だ。2つ目も送信。

「はあ〜。」

隼人は大きなため息をついた。

そして携帯の電話帳を開き、さっきとはまた別のある人物の電話番号を出した。

（イギリス・ロンドン本部）

その頃、ある人の携帯が鳴った。

その人物は背広から携帯を取り出すと届いたメールを確認する。

『じゅん。』

でも仕事は最後までやり通すから。』

そのメールを見終わると、携帯を閉じ、目も一緒に閉じた…

〈テーマパーク内本部〉

「あー、わかんねー！」

暗号を解いていた高田が頭を掻きむしりながら言った。

隼人からの無線のあとほとんどの警察官とIDOの捜査員は本部に戻って来ており、全員で暗号を解いていた。それから数十分後、酒井の携帯が鳴った。

酒井は届いたメールを確認すると机を思いつきり殴った。

本部にいた全員が酒井の方を向いた。

酒井は握っていた拳を少しだけ震わせると急に立ち上がり本部を出て行ってしまった。

「どっしたんだ？急に…」

高田が不思議そうに言った。

「さあなあ。なんか気にさわるようなことでもあったんだろ。」

紙からは目を離さず、あっさりと答える知枝。

外に出た酒井は先程届いたメールをもう一度見た。

『昨日の命令、もし守れなくても怒らないでください』

「ふざけんじゃねえ。…命令ってのは守るもんだろ。」

酒井は携帯を握りしめた。

「明日架ちゃん、大丈夫か？」

明日架はあれからずっと壁に寄りかかっていた。

手には暗号のコピーが握られていたが、考える気にならないらしい…

「暗号解かないと話にならないぞ…」

先程に続いて知枝が言った。

「…力が入らなくて。」

わかってるんです。今私がやらなきゃいけないことは…暗号を解くこと。でも…」

明日架は今にも消えてしまいそうな小さな声でそう言った。

「どうしたもんかなー。」

知枝が途方にくれていると、今度は明日架の携帯が鳴った。でもそれはメールではなく…電話だった。

画面には“岩城隼人”の文字。

「…もしもし。」

『俺だ。』

「はい…」

『大丈夫か？』

「いいえ…」

『何でそんなに沈んでるんだよ。』

「この状況で明るくしていただける方がおかしいです。」

『それもそうだな…』

暗号は？解けたか？』

「いいえ。」

『手につかないか?』

「…はい。」

『そうか…。』

少し間を置くと明日架が隼人に言った。

「どうして…、どうして私だけ戻したんですか?」

『2人も居る必要ないだろ。』

「それは!…そうですけど。でも…。」

『もういいから。それは。要はお前が暗号を解いてくれればいい話だろ?それ以上もそれ以下もない。それだけだ。』

「はい。」

『しつかりしろ、風岡!お前がそんなだと、周りの空気も悪くなる。この件が終わったら泣くなり怒るなり好きなようにすればいい。でも今は、今は踏ん張れ。いいな。』

「…わかりました。」

『ああ、じゃ…また…後で。』

そう言うと隼人は電話を切った。

「隼人か?」

高田が聞いた。

その間に明日架はただ頷いた。

目にはまた、うつすらと涙が浮かんでいた。

最後の“また…後で”が妙に頭の中に残っていた。

「そうか。」

よし！何がなんでも解読するぞ！！」

「はい！！」

爆発まであと
3時間

命がけの仕事(5)(後書き)

まだ終わりません、はい。

でも今回のお話は色々な意味で重要なので、もう少しお付き合いください！

命がけの仕事(6)(前書き)

ついにクライマックスです！

命がけの仕事(6)

あれからどのくらい時間が経っただろうか。やはり17桁ともなるとそう簡単には解けなかった。

明日架はあの電話のあと、人が変わったように仕事に打ち込み始めた。その様子を見て知枝は、逆に気味が悪いと呟いていた。

現在、午後3時45分。

「誰か、何が目星はついたか？」

いつの間にか本部に戻ってきていた酒井が全体に聞いた。

「うーん…。数字は出てくるんだけど、17桁にならねえんだよ。それに犯人は、今まで複雑な暗号文ばかりだったんだろ？それ考えるとやっぱりわからねえんだよな。」

知枝がぐったりしながら言う。

「まあ、あと1時間15分ある。それまでになんとかしても解くぞ！」

「はい…。」

「おい、覇気がねーぞ！向こうでは岩城が1人で頑張ってた。こっちが諦めてどーすんだよ！俺たちは、岩城の命預かってんだ！絶対に止めるぞ！」

「はい…。」

しかし時間は刻々と過ぎていき、ついに爆発45分前、爆弾の電源が付くまであと15分。

「誰かわかったやついるか？」

酒井が聞いても、誰も何も言わない。

「じゃあ、わかりそうなやつは？」

こちらにも誰も反応しない。

「チツ。岩城、お前は何かわかったか？」

酒井は無線で隼人にも聞いた。

『いいえ全く。見当もつきません。』

「そうか……。わかった。」

隼人の答えに酒井は肩を落とした。

「4時半からなら何回でも暗証番号を入力できる。だから、とにかく何かしら候補をあげておいてくれ。」

「「はい」」

そして爆発30分前。

『爆弾の電源が入りました。』

「よし、行くぞ。」

k t g m d a 2 5 7 # 4 2 e g u s 3

どうだ？」

『違います。』

「次行くぞ。」

4 7 5 2 2 6 5 4 r j b g n , 3 2 0

『…違います。』

「次だ！」

b k 3 5 6 2 i t b p 4 2 # j G - n

『…違いますね。』

この後もいくつか試みてはみたが、すべて違った。

「チッ。他に無いのか！？岩城、お前も何か無いのか？」

『試してみましたが、駄目でした。』

「そうか。石川あと何分だ？」

「あと10分です！」

「あつ、すみません、いいですか？」

と言ってきたのはIDOではなく、警察官。
その警察官が言った暗証番号を入れてみる…

『違うようですね…』

「そうですか…、すみません。」

『いいえ、ありがとうございます。』

いくら考えてもわからない…
時間がない……

IDOの捜査員と警察官たちに、焦りが出てきた。

「あと3分です！」

追い討ちをかけるような石川の言葉にその焦りは高まる…

「クソ、どうすりゃいいんだ！」

高田の苛立った声が聞こえる…
全員が暗号の絵を食い入るようになっている。

「あと2分です！」

その時…

『残念だ。今回は簡単にしたのに…。結局警察は無能なのか。やはり、今回も僕の勝ち。』という言葉が液晶画面に出てきました。隼人から無線が入った。

「どういう事だ？簡単にしたって…」

「もしかして…」

明日架が紙になにかを書き始めた。

「あと1分！」

……。

全員が明日架を見つめる。

これに全てがかかっている。

……。

「あと30秒…！」

……。

「あと15秒…！」

……。

「10、9、8、7、6」

明日架は急に顔を上げると無線に向かって言った。

「123456107891011112です！」

「えっ、明日架ちゃんそれ、数字だけだし……」

「3、2、1！」

知枝が呟くように言った直後に、午後5時。

……………。

「岩城…、岩城！」

『はい、残り1秒でなんとか……』

「ヨッシャー……！！」

本部にいた捜査員が喜んでいるなか、明日架はヨロヨロと歩きながら本部を出ていった。

「でもなんであの数になったんだ？」

知枝の言葉に酒井も頷く。

「あっ、そういうことが……」

明日架が何かを書き込んでいた紙を見て高田が納得した。

「絵は、半分に割れた月の間に漢字の十だろ？月は空に浮かぶ月じゃなくて、1月とか2月の月。1〜12月を半分にするると1〜6月と7月〜12月。で、その間に“10”を入れる。と、12345610789101112になるってわけだ。」

「よく考えると爆弾の置き場もいつもより簡単に場所も暴けたしな。」

「いつもの裏を欠いて簡単にしてきたんだな…。」

隼人が“恐怖の館”から出ると、外は夕日でオレンジ色に染まっていた。

待機していた爆弾処理班に爆弾の場所を伝え、本部に向かって一歩一歩、ゆつくりと歩いていく…

ふと、何かを思いだしたように携帯を取り出し、電話をかける…

『はい、岩城です。』

「もしもし、親父？俺、隼人。」

『おお、どうした？』

「メール見た？」

『ああ。』

「あれ…忘れて。」

『…わかったよ。』

「じゃ、また。」

『ああ…。隼人！』

「ん？」

『ご苦労だったな。』

「うん。」

携帯を切った隼人は夕焼けの空を仰ぎ見る。

そして目を閉じ、息をゆっくりと吸って、吐くと前を向いて、目を開いた。

すると隼人の目に入ってきたのは…

明日架だった

明日架は隼人を見つけると、一瞬立ち止まった。しかし、またゆっくりと歩き出した。

隼人もそれを見て、同じようにゆっくりと歩きだす。

2人の間が1mほどになったとき、2人とも立ち止まった。

隼人は明日架の目が赤くなっていて、さらに涙が浮かんでいることに気がついた。

それを見て、少し微笑むところ言った。

「なんで泣きそうになってんだよ。ちゃんと生きてるだろ？」

「解決したら、泣くなり怒るなりしていいって言ったのは、岩城さんですよ…」

「そうだったな。じゃあ好きなようにどうぞ。」

少しふざけて言った隼人は、大方思いつきり泣かれるか怒るかだと思っていた。

しかし…

明日架は俯いたままゆっくりと隼人に近づく…

そして、顔を上げ隼人の顔を見つめると

パシンッ！

「！」

隼人も予想だにしていなかった…平手打ち。

「ふざけないでください…。」

どれだけ心配したと思ってるんですか!?

もし…もし岩城さんに何かあったら…私!…。」「

そこまで言っつて、明日架は何かに気付き黙り込んでしまっ…。」

「と、と、とにかく、ご自分の命はもう少し大切にしてください!」

そう言っつて明日架はどこかへ走っつて行っつてしまった。

隼人はしばらくその場に立ち尽くしていた。

「もしお前に何かあったら…なんなんだろうな?」

酒井が隼人の元へ歩みよっつてくる。

「部長…。」

「岩城、ちゃんと守ったな、命令。」

「はい。」

「フツ。赤くなっつてるな、ココ。」

酒井は自分の頬を指差しながら言っつた。

「まさか平手打ち喰らうとは思いませんでした。」

「ハハハ、そうだな。」

泣いてたな…風岡。」

「…はい。」

生死…って言うものに敏感みたいですね。」

「そうだな…。さすが、良くわかってるじゃねえか。でも、泣いてる理由…それだけだと思っつか？」

「……。」

「なんとなくはわかってるんだろ？」

隼人は少し笑っただけだった。

こうして、長い1日は終わった。

移り行く気持ち

午後5時。

あるファミリーストランに1人の男がいた。
座っている男の目の前にあるノートパソコンの画面には“解除されました”の文字。

「警察は優秀な協力者を得たようだな…。さて。」

そう言うと男は会計を済ませ、どこかへと向かった。

↓次の日：I D O日本支部↓

「はい…はい…そうですね、わかりました。
…いいえ、ではまた。」

酒井は電話を切った。

「どうかしたんかい？」

知枝が体ごと酒井の方に向きながら聞いた。

「三浦正一が昨日、自首してきたそうさ。」

電話は葛西警部からだった。

昨日午後5時半過ぎ“三浦正一”と名乗る男が警視庁に自首してきた。

所持品からその男が三浦本人だとわかり、早速事情聴取が始まった。三浦は犯行を認め、素直に聴取に応じているという。

「三浦が言っていたそうさ、“今回のように、これから協力者の方々と団結して犯人逮捕に全力をあげてほしい”って。」

「協力者って俺たちのことか？」

知枝が酒井の言葉に少し驚きながら聞くと酒井は頷いた。

「三浦は自分のような人間をまた生み出さないためにも警察の捜査力を上げたかったんだと。」

「でもだからって、犯罪に手を染めたらアウトだな。」

「それとなあ、葛西警部な、また捜査協力お願いしますよとさ。」

酒井は、少し満足げに言った。

「そう言えば…」

知枝がふと、明日架に言った。

「明日架ちゃん、前に隼人のこと苦手だって言ってたよな？」

急に隼人の話を振られ、明日架は少し焦った。

「…は、はい。」

それがどうかしたんですか？」

「んー？」

いやさ、あんな事を言ってた割には随分と仲良くやってるし、昨日の事件の時も隼人のことで泣いてたろ？しかも、平手打ちお見舞いしてやったらしいじゃねーか。いつも控え目な明日架ちゃんがそんなことするなんて、よっぽど心配してたんだな。でも確か…苦手だったはずだよな〜って思ってたよ。」

明日架は驚いた。

確かに隼人への第一印象は“この人、苦手かも。”だった。しかし、それがいつからかサッパリ無くなっていく。それどころか、昨日は感極まって隼人に平手打ちをしてしまった。知枝の言う通り、本当に心配していたのだ。

『やっぱり岩城さんのこと…』

明日架が心の中で色々と考えていると、知枝が優しくこう言った。

「好きなんだろ？あいつのこと。」

核心を突かれ、明日架は黙ってしまふ。

「まあ、叩いたことは謝っとけよ。」

知枝は明日架の肩に軽く触れると、お先くと言って帰っていった。明日架は今日は非番でいない隼人に電話をかけた。

『もしもし』

携帯の向こうから落ち着いた声が聞こえてきた。

「風岡です。」

『うん、どうした？』

「あ、あの…昨日は…すみませんでした。」

『いや、別に気にしてないから。』

「…。」

『黙るなよ。』

「いやだって…岩城さんは先輩なわけですし、何かその…これではいい、おしまいというわけには。」

『じゃあどござるっていうんだよ。怒鳴れとでもいうのか？』

「いや、そういうわけじゃ…。」

少し時間をおいて隼人がこう言った。

『あれは、俺にも非があることだったし、お前は俺のことを心配してくれていたから殴ったんだろ？だから気にしなくていいよ。』

「…はい。」

じゃあ、もし何か困ったことがあったら言ってください。手伝います。」

『わかった。』

隼人は少し笑いながら言った。

移り行く気持ち（後書き）

段々と自分の気持ちに気付き始めている明日架。

でもやっぱりはつきりとしなないのは、彼女が本当に人を好きになっ
たことが無いから…。

このあと、明日架は隼人への気持ちをどう受け止めていくのか。
そして、隼人はその気持ちにどう答えるのか…。

楼紅祭の悲劇

〔学校〕

暑かった夏に比べ幾分過ごしやすくなり、葉も少しずつ紅く染まり始めたころ、昂楼学園では一大イベントが行われる。

まじまじ
楼紅祭。

クラスごとに何をやっても良い。教師はほとんど口を挟まず生徒たち自身で作り上げていく文化祭だ。

ある日のLHRで^{ロングホームルーム}1年C組では楼紅祭の話し合いが行われていた。

「えーそれでは、文化祭で何かやりたいことはありませんか？」

学級委員の質問に藍子が真っ先に答えた。

「はい、はい！劇やりたいです！」

藍子の言葉を受け、書記の人が黒板に“劇”と書く。

「はい。他に何かありますか？」

「…」

「それでは劇でいいですか？」

「いいと思います。」

LHR始まってわずか1分…早くも決まった。

「では、総監督と助監督。あと脚本家を決めたいと思います。誰かやりたい人。」

「はい！総監督やります！！」

そう言ったのはまたも藍子だった。

「じゃあ仲川さん、助監やってほしい人とかいる？」

「んー。あつ、明日架。風岡さんに助監やってほしいです！」

藍子が指差す先には困ったような笑みを浮かべる明日架がいた。

「風岡さん、やってもらえる？」

学級委員が控え目に聞くと明日架もまた控え目に頷いた。

次の日。

明日架は藍子に誘われて、和也や隼人と共にお弁当を食べていた。

「へえ、劇やるんだ。」

「そう、うちが総監督で明日架が助監。テーマは“叶わぬ恋”」

「「叶わぬ恋？」」

隼人と和也が同時に聞いた。

「昨日のうちにだいたいの話の流れは決めてあるんだよ。」

好きになった相手は、敵だった。そんな困難を乗り越えて、果たして2人はむすばれるのか！？みたいなね。

今日は配役と細かいストーリーを決めるの。」

身振り手振りを加えながらやる気満々に藍子が言った。

「へえ……」

「江口先輩たちはなにをやるんですか？」

「俺たちはねえ、校舎裏の広場で、あの〜店がいつぱいあるやつ…何だっけ？」

「フードコート。」

「そう、それぞれ！」

「フードコートぐらいわかるでしょ……。」

「学級委員なんだからそれくらい覚えておけよ……。」

藍子と隼人からの冷たい一言で少しテンションの下がる和也だった。

「ま、まあまあ…。」

じゃ、文化祭の日のお昼はフードコート行こ。」

明日架が2人をなだめるように言った。

その姿を遠くから見ている人がいることを4人は気付いていない…

昂楼高校では文化祭に力を入れている学校で有名だ。

準備も文化祭の1ヶ月前からほぼ授業無しで行われている。

「はい、それじゃあ配役も裏方も決まったことだし。今配ったスケジュール通りやっていきたいと思えます、よろしくお願いします！」

「はい！」

総監督や助監督と言っても演技のことだけでなく、裏方の仕事の指示も出さなくてはならないので藍子が演技担当、明日架が裏方担当

となった。ただし、明日架は演技の台詞や内容を、藍子は裏方の準備計画を把握してはいる。

「じゃあまず、大道具さんたちは体育のステージの寸法を測ってリストにあるものの製作をお願いします。

小道具さんもりスト見て作り始めてください。

衣装さんは3階の備品室に衣装があるから、リストを見て必要なものを予約してきてください。もし無い物があつたら教えてください。音響さんは脚本を見ながら場面に合いそうな音を、音楽室と放送室にあるCD、あとはネットから探してください。

照明さんはまだやること無いので他のところを手伝ってください。何かわからないことがあつたら私が藍子に聞いてください。それじゃあよろしくお願いします。」

明日架の的確な指示のもと、それぞれが動き出した。

「あ、あの…。」

ある一人の男子がおどおどしながら明日架に声をかけてきた。照明係の関君だ。彼はクラスでは控え目で、明日架はもちろん、他のクラスメイトともあまり話さない。

「どうかした？」

「その…僕…どこを手伝えば…。」

「ああ、んー。」

「じゃあ小道具手伝ってもらえる？時代劇だから刀を沢山作らなきゃいけないの。それをやってもらえると助かります。」

明日架はごく普通に答えた。

「わ、わかりました。」

この2人の姿もまた、ある人物に見られていた。
これがきっかけとなり、ある悲劇が起こる…。

楼紅祭の悲劇(2) (前書き)

大変お待たせいたしました(< | >)

ではどうぞ(^ ^)

楼紅祭の悲劇(2)

「明日架、ちょっといい？」

声をかけてきたのは役者の女子だった。

「うん、どうしたの？」

「藍子がさ、悩んでるみたいで……。」

「なにを悩んでるの？もしかして江口先輩のこと？」

明日架は少し心配になってしまった。

「あ、ううん、違うよ。そのー、脚本のことです。」

「脚本？」

「うん、とにかくちょっと来てもらってもいい？」

「うん、わかった。」

まだ状況がはっきりと理解出来ない明日架は、藍子の元へ向かった。

「成る程ね。」

藍子に話を聞いたところ、お話の中で何かもう一つ話を付け加えたらしい。

「なんかない？」

これが決まらなないと演技の方が全く進まない。
だから役者たちが困っていたのだ。
するとその時…

「あ、あの…。」

ある人物が声をかけてきた。

「あ、関くん、どうしたの？」

「その…例えばヒロインがその家の本当の子供じゃ無かったとかどうかな…？」

「成る程ね…あっ！でかした関！」

藍子はそう言つとシャーペンを手に取り勢いよく何かを書き始めた。

「…。」

全員の視線が藍子に向いた。

「ゴホン！」

ちよつと粗筋を変えてみました。

血縁を重んじる石神家と家族の絆を重んじる橘家があった。その2つの家は古より争いが絶えなかった。そんなある日、石神家の嫡男と橘家の娘が出会い、決して叶うことの無い恋に落ちる。

そしてある出来事から橘家が衰退していつてしまふ。対立していた石神家はこの機会に橘家を一気に滅ぼしてしまおうと、橘家の血縁にある者は全て捕らえ殺してしまおうと考えた。嫡男は何とかして姫を助けたいと思っていた時、姫が橘家の血を引いていないことを知った。

こんな感じでどうかな？」

「…。」

藍子が一気に沢山のことを話したので周りは若干困惑している。

「うん、いいと思うよ。」

ようやく理解出来たのか、誰かが賛成の意見を言った。するとそれに続き、ほとんどの人が賛成した。

「よし、じゃあ少し台本変えなきゃね。

あつ、関！ありがと。お陰で助かった。」

藍子が関の肩に手で軽く叩きながら言った。

「あ…いや…。」

僕は特になにも…。」

「そんなこと無いよ。関君がアイデアを出してくれたから藍子の悩みが解決した訳だしさ。でもよく浮かんだね。」

明日架の言葉に関が黙りこんでしまった。

「どうしたの？」

関は俯いたまま呟くように言った。

「あ、その…。いやなんとなく…。」

「そっか…。」

「じゃあ、僕…小道具手伝ってくる。」

「ま、そういうことでこれからはどんどん進めて行くよ!」

藍子は張りきりを取り戻し、明日架は少し苦笑いをした。

「ちよつといいかな…?」

小道具を手伝いに行こうとしていた関に、ある女子生徒が声をかけ

てきた。

「な、なにか…。」

「あなた、関君よね？」

「はい。」

「…いいこと教えてあげる。」

楼紅祭の悲劇(2) (後書き)

はい、しばらく更新しません)、)

テスト勉強に専念させていただきます。

葉瑠衣は頭が良くありません(T|T)
なのでピンチです…

中途半端で本当にごめんなさい。

楼紅祭の悲劇(3) (前書き)

お待たせいたしました！

今回はR15にあたるかもしれないので苦手な方は閲覧しないよう
にお願いします。

楼紅祭の悲劇(3)

明日架が小道具の手伝いをしているところに藍子がやって来た。

「明日架、ごめん。」

「どうしたの？」

「登場人物、1人増えた。」

「え、今から？」

何せ文化祭当日までそう時間もない時期の藍子からの爆弾発言に明日架は驚きを隠せない。

「どうしてもいないとヤバいんだよね。セリフも全然無いし、役者も決まったから…後は…衣装だね。向こうの棟の3階の備品室に衣装がまだ残ってた筈だから、悪いけど追加お願い。」

藍子は隣の2棟を指差しながら言った。

「わかった。どんなのがいいの？」

「うーん。何かね、ボロければなんでもいいや。」

「フフ、わかった。じゃあちよつと探してくるね。」

「よろしくー！」

明日架は2棟の3階、備品室へと向かった。

…その光景を見て、静かに、誰にも気付かれないように後を付けている人物がいるとも知らずに。

「備品室、備品室。」

…あっ、あった。

ん？鍵閉まつてるんじゃない？」

そう思ってノブを回してみると

ガチャ

「あれ？開いた。ま、いつか。」

中に入り衣装を探し始める。

その頃…

「あ!!」

「な、なに!？」

藍子が急に大きな声を出したので、教室にいた全員が一斉に藍子の方向を向いた。

「あの役じゃないや。」

「「え?」」

「もういた…。」

「明日架衣装取りに行っちゃったよ?」

小道具の女子が藍子に教えると…

「あ、ちょっと行ってくる!!」

藍子は備品室へと向かった。

「ボロければなんでもいいやつて…。結構色々ある。」

明日架がまだ沢山残っていた衣装を眺めていると

ガチャ

開いた扉の方に目を向けるとそこには

「関くん？どうしたの？」

何故か備品室に入ってきた関。

ゆっくりと明日架の方へ近付き彼もまた衣装の方へ目をやった。

「仲川さんが…選ぶの手伝って来てっ…。」

明日架はおどおどした関の様子に若干不信感を抱いたが、そこまで気にはしなかった。

「じゃ、ちょっと手伝って。」

「仲川！」

備品室へ向かって走っていた藍子を教頭の新田先生が呼び止めた。

「はい。」

「廊下は走るなって小学生の時に言われなかったか？」

「あゝ言われたようなく言われて無いようなく。」

「言われてるはずだぞ？」

「急いでたんですよ！」

「なら部活の時もそれくらい真面目に走って欲しいものだな。」

新田先生は藍子の部活の顧問でもある。

「っ！……わかりました。すみませんでした！」

半ば投げやりに答えた藍子だった。

藍子と先生がそんな掛け合いをしている間に、明日架と関は衣装を決めて教室に戻ろうとしていた。

「手伝ってくれてありがとう。」

明日架がお礼を言っても関は俯いたまま何も答えない。

「関くん？」

「
ですよね」

「え？」

俯いたまま、しかもとても小さな声で言ったので明日架は聞き返した。

しかし返答がない。

少し関に近付くと関は急に顔を上げた。

「付き合って…くれるんですよね？」

「…え？」

「だって、そう言ってたって…」

関の言っていることが全く理解出来ない明日架はこう答えた。

「ごめん、何の事だか全くわからないんだけど。最初から説明してもらってもいい？」

その瞬間、関の表情が一変した。

その表情は悲しみと怒りに満ちていて、いつもの関の雰囲気とはまるで違った。

「…言ったじゃないか。言ったじゃないか！付き合ってくれらって
！！」

すると関はいきなり明日架を突き飛ばした。

予想外の出来事に対応しきれなかった明日架はそのまま後ろへ倒れ
込んでしまった。

「ちょっと…待って、どういう、イヤ！」

倒れた明日架の言葉を聞くこともなく、関は明日架に馬乗りになっ
てブラウスのボタンに手をかけた。

「待って！イヤ！」

抵抗しようとした時、ある出来事が明日架の頭に浮かんだ。
いつか倉庫で男2人に挟まれた時のように恐怖心が彼女を襲い、体
が動かなくなり、手足が震え、抵抗できなくなっていった。

「お、おねがい…やめ、て…イヤ…おねがい」

ちょうどその時だった

「明日架！ごめん、やっぱあの役いらなか……。
関、なに、やってんの？」

藍子は目の前の光景に言葉を失った。

すると関は明日架から離れ藍子に近付いて行った。

「なんだよ…なんだよその目は!!」

藍子に殴りかかろうとした関に向かって明日架が叫んだ。

「やめて!!」

楼紅祭の悲劇（4）（前書き）

今回も前回と同様、R15にあたるかもしれないので苦手な方は閲覧しないようにお願いします。

楼紅祭の悲劇（4）

「一つ疑問なのがさ」

階段を上りながら和也が隼人に言う。

「学校の衣装にさ、はっぴなんてあんの？」

クラスの何人ががはっぴを着て販売をしたいと言い出したので、2人は2棟3階の備品室へはっぴを探しにきたのだった。

「さあな。ま、買わないに越したことはないから。」

隼人がそう言い終えたあたりで階段を上がりきった。

2人が備品室に向かって歩いてみると…

ガタン！！

大きな物音と共に誰かの怒鳴り声のようなものが聞こえてきた。

「なあ、今の備品室の方から聞こえなかったか？」

和也が隼人の方を見ながら問いかけると隼人は頷いた。

2人の歩みがさつきよりも確実に速くなった。

ガチャ

隼人と和也が備品室の扉を開けた。

その先に広がっていた光景に2人は言葉を失ってしまった。

奥には服の乱れた女子生徒が1人とその彼女に馬乗りになり、驚きと焦りの表情を浮かべながら隼人たちの方を向いている男子生徒が1人。

更に扉の真横には半泣きで座り込んでいる女子生徒がまた1人。

隼人と和也はその2人の女子生徒が誰なのかすぐにわかった。そして隼人は和也の方を向くことなく、静かにこう言った。

「和也は仲川さんを連れてとりあえずここから出る。どこか安全な場所に彼女を連れて行ったら誰か先生を1人、ここへ来させてくれ。それが終わったらお前は仲川さんの側に居てやれ。」

俺はあの男子生徒と風岡さんを何とかする。」

和也は男子生徒を睨み付けたまま、わかったと言い、座り込んでいる女子生徒、藍子を立たせ備品室から出た。

「大丈夫か、藍子。」

和也は藍子の肩を抱くようにしながらゆっくりと歩く。

「うちは、なにも。明日架が、助けて…くれたから。」

藍子はまだ震えていた。

すると前の方から和也たちの担任が歩いてきた。
体育科の天野先生だ。

「天野先生！今すぐ備品室に行ってください！！」

「え？」

「いいから、早く！」

天野は和也のただならぬ表情と隣にいる藍子を見て、何かを察したように言った。

「…わかった。お前たち2人は怪我は？」

「俺は全く。藍子は？」

藍子も首を横に振った。

天野は頷くと走って備品室に向かった。

和也は聞くか聞かないか迷っていたことを、思いきって聞くことにした。

「藍子、辛かったら言わなくてもいいからな。
…何があつたんだ？」

藍子は一緒躊躇したものの、自分の手を強く握りしめたあと、こっそりだした。

「うちが備品室に行った時、関が、あの男子、関って言うんだけど、あいつが明日架に馬乗りになつてたの…」

「明日架！ごめん、やっぱあの役いらなか……。
関、なに、やってんの？」

藍子は目の前の光景に言葉を失った。

すると関は明日架から離れ藍子に近付いて行った。

「なんだよ…なんだよその目は…！」

藍子に殴りかかるうとした関に向かって明日架が叫んだ。

「やめて!!」

関の動きが止まった。

「関君が…用があるのは…藍子じゃなくて、わ、私でしょ。」

すると、関は明日架の方へ向き直った。

それと同時に藍子は壁づたいに崩れ落ちるように座り込んだ。

「嘘ついたの？」

僕と付き合いたいって言ったのは嘘だったの？」

関がゆっくりと明日架に近寄っていく。

「私は…そんなこと……言っ、ない。」

すると関は近くにあった机を蹴り飛ばして叫んだ。

「嘘つきめ!!」

関は勢いよく明日架に近付いて馬乗りになり明日架のブラウスに手をかけて一気に引きちぎった。

ボタンがいくつか飛び散るほどの勢いだった。

その時、備品室の扉が開き隼人と和也が入ってきた。

「明日架はまた自分が襲われるかもしれないのに、うちのこと助けてくれた。

でも…うちは、うちは何も出来なかった。

怖くて…、体が動かなくて…。

うちは、親友のこと……助けられなかった。

最低だね…。」

藍子の目からは涙が溢れていた。

和也はそんな藍子を思わず抱き締めた。

「そんなことない。そんなことないよ、藍子。

それが普通だ。藍子が普通なんだよ。

ただ…ただ明日架ちゃんが勇敢だっただけだ。」

藍子は和也の胸に顔を埋めて泣いていた。

「さて、この状況をどう説明してもらおうか。」

藍子と和也が出ていくと隼人は一歩、関に近づいた。そして静かに、しかしとても威圧感のある声でそう言つと関は慌てて立ち上がり明日架から離れた。

「あ、いやこれはその…ちょっと色々と…。」

「色々と何なんだよ。」

「あ、いやだから。…あの…すみません！」

そう言つて立ち去ろうとした関の腕を隼人が掴んだ。

「俺に謝るな…。」

すると扉が開き天野が入ってきた。

「おお、岩城。江口に言われて来たんだが…何があつたんだ？」

と言つた天野が奥にいる明日架を見つけると何かを問いかけるように隼人の方を見る。

そしてその問いに答えるかのように隼人は頷いた。

「あの子はお前の知り合いか？」

「はい。」

「じゃあ、あの子のことを任せてもいいか？俺はこいつを取り敢えず1階の小会議室にでも連れていくから。」

「わかりました。」

天野は抵抗する関の腕を引っ張りながら出ていった。

天野達が出ていくと、隼人は明日架に近付いて行った。隼人は微かに震えている明日架の肩にそっと手を置く。すると明日架はビクンと反応し、先程よりも少しだけ震えが大きくなった。

「大丈夫、俺だ。」

いつもよりも優しい隼人の声を聞いて明日架は顔を上げた。

「…関君は？」

「天野先生が連れていった。気付いてなかったのか？」

「はい…」

あ、藍子は？」

声を震わせながら聞く明日架を見て、隼人はしゃがんで彼女と同じ目線になった。

「和也と一緒にいる。」

明日架は一瞬安堵の表情を浮かべ大きなため息をついた。

天野が来たことも、和也が藍子を連れていったことにも気付かないほどの恐怖が明日架に襲っていたことを改めて思い知った。
隼人は自分が着ていたブレザーを彼女に羽織らせながら言った。

「保健室行こう。養護教諭の西島先生は俺たちのこと知ってるから。」

「

明日架は隼人のブレザーを強く握りしめながら小さく頷いた。

楼紅祭の悲劇(4) (後書き)

ご意見、ご感想などお待ちしています。

気軽にどうぞ！

楼紅祭の悲劇(5) (前書き)

随分とお待たせいたしました。
すみません。

ではごっごー！

楼紅祭の悲劇(5)

保健室のドアを開けると白衣を着た西島が机に向かって何かを書いていた。

「どーしたー？

トンカチで指でも叩いた…わけではなさそうね。」

机から顔を上げると言いかけた冗談を自分で否定した。

「とりあえず、隣の部屋で休もうか。

岩城君はちよつとここで待ってて。」

明日架の様子を見て大体の事情を察したらしく、隼人を残し明日架を隣の保健準備室へと連れていった。

「ここはほとんど人が来ないからゆっくり出来ると思うわ。替えのブラウスを持ってくるから、その間はこのTシャツ着てて。」

保健準備室にはベッドが1つだけ置いてあり、明日架はそこに座らされた。

「少しここで休んで。」

できれば眠った方がいいけど、横になるだけでも違うから。何かあったら呼んでね。」

明日架は小さく頷いた。

西島が部屋を出ようとしたとき…

「先生！」

明日架が呼び止めた。

「なに？」

「これ、岩城さんに。」

明日架が西島に綺麗にたたまれたブレザーを渡す。

「ありがとうございますって伝えてください。」

「わかったわ。でも学校では“岩城さん”じゃなくて“岩城先輩”じゃないとダメよ。」

西島が微笑みながら言うと明日架は小さく笑って頷いた。

「これ、風岡さんから。」

先程明日架から渡されたブレザーを隼人に手渡す。

「ありがとうございますだって。」

隼人は受け取ったブレザーを軽く握りしめた。

「何があったの？」

「俺も詳しいことはわからないんですけど、同じクラスの男子生徒に襲われたみたいです。」

「一応最悪の事態だけは避けられたみたいですけど。」

最悪の事態とはおそらくあのまま襲われてしまつと言つことだろう。

「そう。その場には他の子はいなかったの？」

「風岡の友達仲川さんが。そちらは襲われたわけではなさそうでしたけど、とりあえず今は教室で彼氏と一緒にいると思います。」

「そう。」

「一旦教室に戻って仲川さんの様子を見たあとに小会議室、今回の騒動を起こした張本人に会ってきます。詳しいことがわかったらまた来ます。」

「わかったは。仲川さんも、もし駄目そうだったらここへ来るように言つて。」

隼人は頷くとブレザーを着て出ていこうとした。

「岩城君」

西島が腕組みをしながら隼人を見つめた。

「もっと早く助けられれば…とか思っただけじゃないわよね？」

隼人は何も言わない。

「駄目よ、そんなこと考えちゃ。あなたのせいじゃないんだから。」

隼人はそのまま何も言わずに出ていった。

「和也」

「あ、隼人。」

隼人が1年C組の教室に着くと、藍子と和也、担任の田中とその日たまたまいたスクールカウンセラーの塚田、そこから少しだけ距離をとってクラスメイトたちがいた。

「どうだ？」

「あ、うん、大分落ち着いてきた。塚田先生もいてくれたし。」

「そうか。仲川さん、怪我はないんだよね？」

「…はい」

「なら、よかった。」

教室に沈黙が流れた

「あの…」

それを打ち切ったのは藍子だった。

「明日架は、どこに？」

「…大丈夫なんですか？」

「今は保健室で休んでる。」

怪我とかは特に何も…。

西島先生が仲川さんも保健室で休んでもいいって言ってた。」

「保健室…。かず、保健室行きたい。明日架のどこに行かなきゃ」

藍子は立ち上がって和也の腕を引っ張りながら歩き出した。

「行っても風岡さんには会えないよ。」

藍子が立ち止まり、隼人の方を向いた。

「何ですか!?!」

「多分寝てる。それに、今は会わない方がいい。」

「そんな！うちら親友ですよ？」

「だからこそだよ、藍子。」

身を乗り出すように訴える藍子を和也がなだめた。

「仲がいいからこそ、今すぐにはさ、なんとなくわかるだろ？」

きつと風岡さんのことだから藍子に心配かけまいと“大丈夫”って
言うぞ絶対。

こんな時に気を使わせたくないだろ？」

藍子は俯いて小さく頷いた。

「どうする？保健室で休ませてもらうか？」

和也が藍子の顔を覗き込むようにして聞くと小さく首を振った。

「和也、俺はこれから小会議室行くけどどうする、行くか？」

「小会議室？」

「うん、あいつがいる。」

「…行く。」

藍子、しばらく俺いなくても大丈夫だよな？」

「関のそこ行くんだよね。大丈夫だよ。行ってきて？」

和也は頷き、2人は教室を出た。

楼紅祭の悲劇(6) (前書き)

大分お待ちせしました！

ではございませー！

楼紅祭の悲劇（6）

隼人と和也は“小会議室”と札の出ている教室へ入っていった。中には椅子に座った関と机を挟んで反対側に座る天野。そして関の斜め後ろで腕組みをしながら立っている教頭の江頭がいた。

「おお、岩城、江口。」

天野が少し困ったような表情を浮かべていた。

「何か話しましたか？」

和也が後ろから関の方を睨みながら聞いた。

「いいや、何も。」

「俺に代わってもらえますか？」

隼人が言った。

ああ、まあいいがと言って天野が立ち上がる。そこへ隼人が座り一息つくところ切り出した。

「俺は岩城隼人。3年だ。」

関は黙ったままだ。

「風岡さんと仲川さんとは同じクラスなのか？」

隼人の声はいたって穏やかだった。

関は小さく頷いた。

「風岡さんってどんな人？」

突然の問いに関はもちろん、和也や天野、江頭までもが驚いていた。

「…知り合いなんじゃないんですか？」

関が、文字通り恐る恐る聞く。

しかし、確実に話には食いついてきた。

「うん、まあな。でもクラスでどんなかは知らないからさ。」

和也たちはもはや見守ることしか出来ず、ただただ2人のやり取りを見ていた。

そしてしばらく黙りこんでいた関はようやく話はじめつた。

「…とつても、優しい人…です。」

…あんまり、女子と話したことなくて、俺…。勇気を出して話し掛けても、軽くあしらわれたり、よそよそしくされたりで…。

でも風岡さんだけは違いました。

周りと変わらず同じように接してくれて…。とてもいい人です。」

「そうか。やっぱりいい奴か。」

誰にでもそうなんだな。」

「でも…」

「でも？」

「でも、やっぱり、風岡さんにも嘘を…つかれました。あの人も俺を裏切った…。みんな…、みんな俺のことを。」

「嘘？風岡さんが？」

「どんな嘘を言ったんだ？」

「関は何も言わない…。」

そこで隼人は関にこう告げた。

「さっきは状況が状況だったから無理やり止めに入っただけど、俺は風岡さんの知り合いだからさ。彼女が何か間違っただことをしたなら直してもらいたい。」

「だから何があったのか話してくれるとありがたいんだけど…」

わざと関の話に乗るふりをする。

そしてあくまでも自分が相手の味方であると思わせる。

「なんとも初歩的なことだが、これくらいのことを出来なければID Oにはいられない。」

しばらく黙ったままだった関がようやく口を開いた。

「俺に好意を持ってってくれてるって…。だから付き合おうって言うたらそんな話知らないって…。騙されたんだ、風岡さんに。」

「…だから、許せなくて…。」

「成る程。」

「それは酷いな。」

もちろん明日架がそんなことをする訳がない。
だから…

「風岡さんが君に好意を持っていることをどうやって知ったんだ？」

この後関が発する言葉を、誰が予想できただろうか…

「3年生の…女子の先輩3人組が教えてくれました。」

隼人は小会議室を出たあと半分駆け足の状態で自分の教室へと向かった。

「なあ女子3人組ってまさか…」

隼人の後ろから着いてきている和也が聞いた。

「ああ、そのまさかだ。」

隼人が教室に着くや否や甘ったるい声で話し掛けてくる人がいた。

「隼人君、どこ行ってたのお？はっぴ探すの大変だったら手伝った

のにい〜」

以前隼人との関係についてデマを流した田嶋玲子。

その後ろには、いつも玲子にくつついている石田菜々と有本綾子がいた。

「関にありもしないこと言ったのお前らだな？」

隼人はあくまでも冷静に、しかしとても低い声で言った。

玲子の事は完全に無視。

「なんのことでしょうか？」

綾子が知らない振りの代名詞のような言葉を口にする。

「だから、1年C組の関に風岡さんのこと言ったたる!？」

和也は若干気が急いている。

「風岡さんが関君のこと好きだなんて…そんなくだらないこと、誰が言つもんですか。」

自信満々に答える菜々を見て、隼人と和也は顔を見合せ、何かを確認するように頷きあった。

『あんななんか…生まなければよかった!』

少女に向かって叫ぶように言う女性…

『お前は俺の為に金稼いでりゃいいんだよ…』

不敵な笑みを浮かべ、少女に向かって言う男性…

『ここにいるってことは、お前の存在価値はゼロだ』

少女を見下ろしながら、冷たく言い放つ男性…

『今日は朝までおじさんと楽しもうねえ』

背広の襟に金の菊の花をあしらったバッチを付け、少女を見ながら
下品に笑う男性…

「いや……お、ねがい……やめ、て……イヤ!」

明日架は飛び上がるようにして起き上がった。
夢を見ていた。

明日架は夢に出てきた4人を知っている…。
思い出したくもない…、思い出すだけで恐怖の渦に飲み込まれそう
になる。明日架はそんな感覚を抱いていた。

隣の部屋から西島が飛び込むように入ってきた。

「大丈夫?!」

「…はい。」

西島はベッドの脇に置いてある椅子に座った。

「夢を見ました。」

明日架が呟くように言った。

「どんな?」

西島は明日架の手をそっと握った。

「あの頃の…夢を。」

「そう。怖かった?」

「はい。ひとりぼっちで…誰も助けてくれなかった。

先生?」

明日架は今にも泣き出してしまいそうな顔で西島の方を向く。

「私…やっぱりいい方がいいんですかね…。」

「どうして?」

「だって…私がいなければ、関君はあんなことしなかった。母だって、私がいなければ辛い思いをする必要も無かった。

結局私は、誰からも必要とされてないし、大切な存在でも無い。私
がいると皆が傷つく。だから……」

「それは違う。」

「ずーっと言ってるでしょ？それは違うって。」

もし仮にあなたの言う通りだとして、なんであの時酒井さん達はあ
なたの自殺を止めたの？

なんで今日、岩城君はあなたを助けたの？」

「それは……」

「それに、あなたのお陰で救われた子達も大勢いるわ。
だからね、もうそんなふうに思っちゃダメよ？」

「……はい。」

明日架は自分の手を強く握りしめた。

楼紅祭の悲劇(6) (後書き)

明日架ちゃんの過去が少し見えてきましたね。
今後どうなっていくのか…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4876u/>

私の願いは...

2011年12月11日17時52分発行